
ステップ

鷹橋達也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ステップ

【Nコード】
N1206Q

【作者名】
鷹橋達也

【あらすじ】
15才の少女との逃亡劇。

ヤクザ、警察との情報戦の中、それぞれの人生が交錯していく。

【アクションミステリー】

大好きな作家・伊坂幸太郎さんと福井晴敏さん、そしてリーアム・

ニッソン主演の映画「96時間」の雰囲気を出せたらと思っています。

■

ブローグ

「……………」

誰かに呼ばれたような気がして、
高杉は目を覚ました。

まだ夜中なのだろう。

部屋は薄暗く、眠ってからそれほど時間が経っているようではなかった。

昨晚、大阪のグランドホテルにチェックインした後、
モデル事務所から派遣された女と一緒にいたのだが、その女も既に
帰ったようだ。

部屋には自分ひとりだけだったが、

おそらく部屋の外にはS Pが二人待機しているはずだった。

高杉は与党・民政党の副幹事長で、今年で60歳になる。

世間でならそろそろ定年後を考える年だが、政治家としてはこれからが政治の中枢で活躍する脂がのった時期と言えた。

若さを保つように若い女を抱くのも、高杉のような政治家の特徴だった。

と、その時。

「おはようございます、高杉さん。」

耳元であまりにもハッキリと声がしたので、高杉は慌てて身体を起こそうとした。

だが、首筋に押し付けられた金属の冷たい感触が、高杉の動きをそれ以上許さなかった。

「だっ、誰だ？」

そこまで口に出したが、銃口を更に押し付けられて、高杉は口をつぐんだ。

「質問はこちらがします。あなたは首を振って答えるだけでいいです。」

静かで、落ち着いた口調だったが、反抗を許さない威圧感があった。

部屋は薄暗く、背後に回られていたため、どんな人物かはわからなかった。

だが、声の感じからすると若い青年のようだ。

一体誰だ？どうやって部屋に入ったんだ？

さまざまな考えを巡らそうとしたが、青年の声がそれを制した。

「あなたが今関わっている『郵政事業新改革法案』ですが、第七項の削除を私の依頼主がお願いしたいそうです。」

郵政…、第七項だと？

郵政事業新改革法案は、
郵政族である高杉が中心となって作成したものだった。

そしてその第七項とは、
郵政資金の外資の流入を阻止するための、
いわばこの法案の柱であり、最大の目的でもあった。

第七項が無ければ、この法案はただのザル法になってしまう。

「今回はお願いにあがりましたが、あなたの行動次第では、依頼主は本腰をいれてあなたを潰すことになります。」

話は以上です。
わかりましたか？」

全身に冷や汗を感じながら、
高杉は首を縦に振ってそれに答えることしかできなかった。

「そうですか。
では、そろそろ失礼します。」

今は目が冴えて緊張しているでしょうが、直ぐに眠れますよ。」

そう言つと首筋から銃口が離れ、
その途端急激な眠気が襲つてきて、高杉は再び眠りの中に落ちていった……。



よくある日常

「達也、もうフトンで寝たら？」

と、身体を揺さぶられて、ぼやけた視界が見えてきた。

どうやら寝入ってしまったらしい。

残業終わりで仕事から帰ったのが午前1時前。

遅い晩酌の缶ビールを開けて、テレビを点けると、懐かしい洋画がやっていた。

眠気まなこながら最初はちゃんと見ていたのだが、ブルース・ウィリスが椅子をぶん投げたあたりからの記憶がなくなっていた。

テレビを見ると、アナウンサーと、画面の左上の4時半の表示が映されていた。

トイレで起きてきた智子はすでに寝室に戻っているようで、

鷹橋達也は半分ほど残っていたぬるい缶ビールを一気に飲み干した。画面は変わって、羽柴官房長官が記者の質問に答えている映像が流れている。

羽柴はまだ40代ながら、次期総理大臣に挙げられている有力者だ。人懐っこい顔立ちと、それとは反対のハッキリした物言いから国民からの人気も高かった。

達也から見ても、羽柴はほかの政治家と違って魅力的なものを感じる所があった。

長引く不況とコロコロと看板だけ変わる総理大臣。

そんな国民の閉塞感からか、

この羽柴なら何か変えてくれるかもしれないという期待感が膨れ上がっているのかもしれない。

画面は変わり、アナウンサーがニュースを伝えている。

昨夜、神奈川県某所の雑居ビルで起こったガス爆発事故だ。

消化活動は終わったようだが、死傷者は不明のようだ。

「さて、寝るか。」

4時間後には出勤する。

そんな自分の姿など想像もしたくない。

達也はテレビと部屋の明かりを消してそそくさと寝室に入っていた。

■

O n Y o u r M a r k

「お疲れ様、また明日。」

ビル警備の夜勤を終え、

一ヶ月前からこのビルに配属された、初老の藤原に声を掛けられて、カズマもまた明日、と返事をしてビルを後にした。

時間は世間の出勤風景も薄れた午前10時。

カズマは自販機で買った缶コーヒーを飲みながら、世間の流れと逆行するように帰路についた。

コンビニで朝食を買った後、

カズマは昨晚届いたケータイのメールを見返しながら歩き始めた。

その画面には、

数字の羅列がびっしりと書き込まれているだけだった。

カズマは普通の文章と同じようにその暗号化された文字を読んだ。

「二次検査結果
異常は見られず

ただし、精密検査の必要あり」

その報告に、カズマは違和感を感じていた。

カズマの表向きの仕事は警備員であるが、
裏では「殺し」や「脅し」の仕事もしている。

殺しを専門職としている人間は少ないが、

国によっては秘密警察や情報機関が政治的目的で殺人者を養成し、
公務員として働いている者もいる。

カズマも、形としては「準公務員」のような生活を送っていた。

カズマの請け負う仕事の依頼主は、ヤクザもいたがそのほとんどが
行政機関からのものだった。

カズマと依頼主の間には仲介者がいるので、ハッキリどこの行政機
関かはわからないが、依頼内容にそういった臭いが嗅ぎ取れるのだ。

今回の依頼は「殺し」だった。

「殺し」の対象者の一次検査、
ようは身辺調査なのだが、これは問題なかった。

対象者の名前は、

森田雅明。 32歳。

15年前、森田を含む4名の少年が、
女子高校生をレイプ後拉致、仲間の自宅2階の居室に監禁した。

集団によるレイプ、シンナーを吸わせ、被害者の脇腹や足などを多
数回にわたって手拳で殴打。

全身が血だらけになり、
顔が膨れ上がり、目の位置がなくなる程の殴る蹴るなどの行
為を繰り返した。

真冬の時にベランダに裸で放置、
顔面に蠟をたらす、などの苛烈な行為を20日間にわたり行い、
被害者は死亡した。

翌日、被害者の死亡に気づき、死体の処理に困った森田達は、
遺体を毛布で包み旅行バックの中に入れドラム缶に入れてコンクリ
ート詰めにして、

東京の埋め立て地内に遺棄した。

同年、加害者の少年の一人が別の事件で逮捕された。

その際の取調中の供述により、被害者の遺体が発見されたことから事件が発覚した。

森田ら4名は刑事処分相当として東京家庭裁判所から検察庁へ送致され、刑事裁判にかけられた。

東京高等裁判所の判決は、主犯格だった森田は懲役15年、他の少年はそれぞれ懲役5年、というものだった。

服役した森田は2年前に仮出所したが、昨年強姦殺人未遂事件の容疑がかけられていた。

起訴には至らなかったが、警察は要注意人物としてマークしていたのだ。

以上のような概要であり、仕事を受ける基準からすれば適正ではあった。

そのため二次検査で、殺害過程までに問題があるかのチェック結果を待っていたのだった。

「異常は見られず

ただし、精密検査の必要あり」

精密検査……。

…仕事上の問題は無し。

…ただ何かが気にかかる。

それが検査屋の回答だった。検査屋と直接会ったことは無いが、カズマとは長い付き合いであり、毎回詳細な報告をしてくれる。

その検査屋にも、違和感の正体は分からないようだ。

「報酬はいいんだが…。

辞めておくか…。」

そう言いながら、

カズマはケータイのボタンを打ち込みはじめた。

画面には数字の羅列が並んでいた。



Set!

「プルルルルー」

プラットフォームに発車のベルが鳴り響いた。

西村香織は階段を駆け登り、閉まりかけのドアに身体を滑り込ませた。

乗客の冷たい視線が突き刺さる。

「ハア、ハア、……。」

乱れた呼吸を整えようと、香織は荒い息を何度もしながら空いているシートに腰をおろした。

「お母さん……。」

搾り出したかすれ声と共に、香織は静かに目を閉じた。

香織はセーラー服の上にパーカーを羽織り、赤いショルダーバッグを肩に下げていた。

そしてその両手で薄茶色の封筒を大事そうに抱えていた。

「お母さん……。」

再びそう呟くと、香織は眠りの中に落ちていった……。

■

Ready

「藤原さん、今日夜勤だったんだ？」

時間は午後6時を回ったところで、
日勤を終えたカズマが、先程まで一緒に勤務していた藤原に声をかけた。

「急に鈴木くんが休むことになってね。年寄りには夜勤がこたえるよ。」

背中を丸め、疲れきった声で藤原が答えた。

このビルには、派遣会社から5人が警備員として来ていて、カズマもそのひとりだった。

ビルのテナントは15軒分あったが、不況のあおりか、今のところ5軒が空き店舗となっていた。

勤務は5人でローテーションを組む形になっていて、

日勤は基本的に2人体制、藤原と顔を合わす機会も多かった。

休みたければ警備会社に報告しなくても、お互いに調整するぐらいの融通は利いたので、

カズマもあつちの仕事柄、何度か勤務を代わってもらつてゐた。あつた。

「それじゃ、お先に失礼します。」

「うん、お疲れ様。」

藤原と挨拶を交わし、カズマはビルを後にした。

カズマは繁華街を歩きながら、森田雅明の件について考えていた。

検査屋からの追加報告がカズマに届いたのだが、

それによると、

カズマのもとに森田の「殺し」の依頼がくる前に、誰かが森田に「脅し」をかけていたようなのだ。

ところが、誰が何の目的でやったのかの情報がほとんど入ってこない。

この状況からすると、森田は相当重要な情報を握っており、森田がその情報で何らかの取り引きを持ち掛けた。

ところが、取り引き相手はそれに応じず、森田の処分を決めた、というところだろう。

「うん」

と、その時、カズマのケータイにメールが入った。

「……………」

カズマの顔が曇った。

見知らぬアドレスなのだが、文章は数字の羅列、カズマが使用している暗号文で送られてきていた。

その内容は

「女性が自宅へ向かっている。
保護して下さい。」

時間は午後7時になろうとしていた……。

■

Meeting

香織が駅を出た時、日は落ちて午後6時になろうとしていた。

香織は手紙を開き、そこに書かれた住所と地図を頼りに、繁華街の雑踏を避けるように歩きはじめた。

始まりは、この手紙からだった。

香織が暮らす施設にこの手紙が届いたのは、一週間前のことだ。

封筒には香織の名が書いてあったが差出人の名は無く、その中には手紙が二枚と壹万円札が一枚入っていた。

手紙の一枚には、見知らぬ住所と地図が書かれていて、もう一枚のほうにはこう書かれていた。

「香織、

近いうちに、あなたを訪ねてくる人がいるかもしれない。

その時は、地図に書かれた場所に行きなさい。

黒岩アキラという人がきつと力を貸してくれるから。

同封した一万円札は、あなたのお守りよ。大切にしてね。

.....。

本当にごめんなさい。

お母さん、必ず香織を迎えに行くから、待っていて。」

お母さんは突然わたしの前から姿を消した。

わたしはお母さんに捨てられたの？

そう自問自答していた香織にとって、久しぶりに感じる母親のぬくもりだった。

香織は唇を噛んで、必死に感情をコントロールしようとしたが、それとは裏腹に、どんどんと溢れでる涙を止めることはできなかった。

だが、この手紙が何を意味するのか、この時の香織にはまだわからなかった。

今日までの一週間は何事も無く過ぎたが、

香織が学校から帰ると、

遠くに見える施設に黒塗りのベンツと背広を着た二人が見えた。

遠目ではあったが、あんな車が施設に来るのを見たことがない。

香織の頭に手紙の文章がよぎった。
と、

背広のひとりがこっちを見ているような気がした。

その時にはもう、香織は駅に向かって走り出していた。

誰から逃げているのかもわからず走った。

暗闇の中を走っている感覚に襲われ、倒れそうになる。

しかし、

突然、香織は肩を捕まれた。

「…、おまえは……………」

■

P r a c t i c e

カズマが自宅のマンションに行くのは久しぶりだった。

自宅とはいっても、名義だけ置いてあるようなもので、実際にそこで生活しているわけではなく、普段はビジネスホテルやカプセルホテルを利用していた。

カズマのマンションは15階建て2棟が繋がる形になっていて、自宅は10階にあった。

カズマが自宅の前まで行くと、ドアの前に少女がいた。

セーラー服姿にパーカーを羽織り、身体を丸めるようにして座り込んでいた。

眠っている…。

この子なのか…？

少女の肩を揺する。

「おい、起きろ。」

少女の身体がビクッと反応し、突然ドアにへばりつくようにして立

ち上がった。

カズマと目が合い、こちらの様子をうかがっている。

「おまえ、誰だ？」

カズマが会話を切り出したが、少女は黙ったままだ。

「ならいい。

面倒な事にかかわるつもりはないからな。

じゃあな。」

そう言うと、カズマは少女に背を向けて歩きはじめた。

「……………黒岩……………アキラさん……………ですか？」

少女のかすかな声が聞こえて、カズマの足が止まった。

……………黒岩アキラ。

懐かしい響きだった。

この仕事を本業にしようと決めた時に捨てた名前だった。

定期的に戸籍を購入してそのたびに手に入れる名前は、カズマ……
黒岩アキラにとって単なる記号でしかなかった。

忘れていた「自分」が突然、目の前に現れたような気がして、アキラは複雑な感情に襲われていた。

「おまえ、何でその名前を……、」

そこまで言っつて、アキラは周りの空気が変化するのを感じた。

「おまえ、追われているのか？
……とりあえず中に入れ。」

ドアのカギを開けながら、アキラは少女に促した。

■

LESSON

「すぐにここを離れる。
そこで待っている。」

少女を玄関で待たせ、アキラはリビングへ行くなりテレビのスイッチを入れ、浴室へと向かった。

浴室の天板を外し、配線に紛れていたビニール袋を取り出す。

ビニール袋を破り、取り出したのは拳銃と銃弾。オーストリア製のグロック17だ。

日本の地下市場でもあまり出回らない代物だ。

すぐにリビングへ戻り、テレビを見つめる。

画面には四分割された映像が流れており、それはマンションの周りに設置された防犯カメラの映像を傍受したものだった。

入口のエントランスに2人、画面で確認できるのは全部で6人。

アキラはテレビと照明を消し、玄関に向かった。

「話は後だ、いくぞ。」

香織は緊張しながらも、静かに頷いた。

ドアを閉めると、エレベーターへ向かう。

エレベーターは一階で止まっている。

アキラはボタンを押した。

エレベーターはこの階まで来た後、誰も乗らなくても自動的に1階まで降りていくはずだ。

エレベーターに背を向け、通路の反対側にある非常扉へ向かう。

アキラはその途中、柱に設置された非常ボタンを押した。

けたたましいベル音がマンション中に響き渡る。

非常扉を開けると階段があり、

10階から地下2階まで一気に駆け降りた。

地下2階に着き、突き当たりの施錠されたドアまで来ると、アキラは二本の針金のような物を鍵穴に差し込んだ。

香織は息切れしたのか、呼吸は荒く肩を上下にしていたが、アキラは呼吸ひとつ乱れていない。

アキラはものの十数秒で鍵を外し、扉を開けた。

扉の向こうは暗闇で、アキラはすぐ脇の壁にあるスイッチを入れた。

照明がついて、打ちっぱなしのコンクリートの壁の中に巨大なボイラーが姿を現した。

この場所に、マンションの公共メインシステムが集中していた。

そのまましばらく真つすぐ進み、再び突き当たった扉を開き、階段を上る。

ここを上がれば、マンションの別棟側に出られようになっていた。

地下一階の踊り場まで来ると、アキラは立ち止まり外の気配をうかがった。

まだ、マンションの非常ベルの音が響いている。

「少し遅れて上がって来い。」

そう言うと、アキラは音も無く一気に階段を駆け上がった。

外へ出るのと同時に左に曲がる。

予想通り、目の前に背広姿のガタイのいい男がひとり、近くに別の人影はない。

男と正面に向き合う形だが、
先程から鳴り響く非常ベルの音と
突然現れたアキラに男の動きは鈍い。

一気に間合いを詰め、男が腰の銃に手をやるのを見ながら、右にステップし左腕を伸ばす。

腕を首に滑らせて、そのまま男の背後に回り、両腕を使って頸動脈を一気に締め上げる。

男は抵抗する間もなく気を失った。

そのまま男を地面に寝かせ、外に出てきた香織を連れてすぐそばのフェンスを抜けて道路に出る。

裏道を縫うように走り、車の置いてある駐車場に出た。

「さあて、車の中で詳しく聞かせてもらうぞ。」

この状況に、アキラも少なからず困惑していて、うつむいている香織を問い質すような目を向けた。

と、

先ほどのアドレスからまたメールが届いた。

「……………何だと?」

その内容に、アキラの困惑は一層深まってしまった。

その内容とは、

「森田雅明と接触してくれ

森田の情報が彼女と繋がる。」

■

Hop!

「母親は……西村冴子。
聞いた事が無いな……。」
アキラが呟いた。

車が走り始めてから30分、今は神奈川県の国道を走っていた。

大まかな説明は終わって、香織は徐々に落ち着きを取り戻していた。

黒岩アキラも幾分か緊張を解いていたが、
頻繁に届くメールをチェックしながら、しきりにやり取りをしていた。

香織は、アキラが先程までの雰囲気とは全く違うことに驚いていた。

完全武装したシルベスター・スタローンが、
突然何処にでも居る街中の人に変身したような、
そんなギャップを香織は感じていた。

若く見えるけど、……

年齢は……お母さんと同じくらいなのかな…？

「あの……」。

おじさ……お兄さん。」

香織の言葉に、アキラは苦笑いした。

「15歳の割に、社会勉強してるじゃないか。

まあ、お兄さん、って年でもないからな。」

香織は少し悩むような仕草をして

「じゃあ、アキラさん！」

と、思い切ったように言った。

「ああ。それでいいよ。」

アキラが笑って答えると、香織も笑い返してきた。

香織の緊張が徐々に解けているのは、アキラにもわかった。

もともと快活な子なのかもしれないと、アキラは感じていた。

それにしても……。

あまり時間が経っていないせいか、アキラと繋がりのある情報屋とのやり取りで、めばしい情報はまだ入っていないかったが、

とりあえず、アキラはこれまでの事を整理した。

香織の今の状況と、手紙の内容からすると、香織の母親である西村冴子、もしくはその周辺の人物とアキラは何かしら接触をした可能性が高い。

そして、母親の西村冴子についてだが、

事情は分からないが、香織が物心をつく頃には、既に香織は施設に入っていた。

香織と母親は手紙のやり取りを頻繁にしていた、母親は月に一度は施設を訪ねており、一緒に旅行に行ったこともあったそうだ。

ところが、一ヶ月程前から手紙は来なくなり、母親が現れることもなかった。

そこへ来て、一週間前にこの手紙が届き、俺の所に来たというわけか。

そして、森田雅明だ。

アキラのもとに届いた森田雅明の殺しの依頼。

その森田が、この件と繋がっている。

にわかには信じられない事だった。

見知らぬアドレスの相手とも接触しようと試みたが、向こうからの反応は無かった。

そして、

同封された壱万円札、だ。

真っさらなピン札なのだが、スカシの部分にマジックペンで、

「お守り」

と書かれていた。

本当に「お守り」のつもりで同封したのか、

何かしらのヒントが込められているのか、

今の時点では図りかねた。

とにかく情報が少な過ぎる……。

森田に接触するしかないのか……。

助手席を見ると、

香織がサイドドアに寄り掛かるようにして寝息をたてていた。

時間は午後9時になろうとしていた…。

■

CONTACT

午後9時未明、

森田雅明は、仕事を終え工場を後にした。

自宅のアパートは
直線距離で200メートル先で、いつも徒歩で通勤していた。

森田は、決められた規則を守るように、この日もいつものコースを歩いていた。

住宅街ではあったが、市道の細い道ばかりで街灯も少なく、薄暗い。

森田が道半ばまで来た時だった。

突然、森田は民家を横切り全力で走り出した。

すると、暗がりの中に森田とは別の影がいくつか浮かび上がってきた。

森田が塀を上り、民家の裏庭を抜けて別の路地裏へと出た時だった。

駐車場が目の前にあり、
その車の一台がライトを点けて、森田の姿を照らし出した。

車は急発進し、タイヤを軋ませながら森田の脇に止まった。

「乗れ！」

それは、アキラの声だった。

森田が倒れ込むように後部座席に乗り、アキラはすかさず車を発進させた。

その途端、ヘッドライトが二人の男を照らし出した。
二人とも既に銃を抜いている。

バックミラーにも何人かの人影が映っている。

「香織、伏せてろ！」

アキラは叫びながら、遮る二人を揺さ振るようにしながら直進する。
前の二人が銃弾を放つが、直進してきた車に気をとられて標準が定まっていない。

一発はボンネット、もう一発はサイドミラーに当たり、弾け飛ぶ。

猛スピードで直進した車に、男の一人がボンネットに乗り上げる形でぶつかり、その上を転がるようにして脇道に滑り落ちた。

前方を抜け脱出したアキラだが、入り組んだ住宅街をなお猛スピードで進む。

倒れ込んでいた森田が、左右に揺れる車内でどうにか体を起こすと、アキラの肩越しから銃口がこちらに向けられているのに気付いた。

アキラは右手でハンドルを切りながら、左手に持ったグロック17を肩で固定するようにして、銃口は常に森田の頭に照準を合わせている。

「手短に済ますぞ。」

アキラは、前方と森田の映るバックミラーに目まぐるしく視線を走らせながら口を開いた。

「わかっている。」

森田はシートに体を埋めた。

アキラはここに来る直前、あらかじめ調べていた森田のケータイに電話をかけてコンタクトを図った。

森田が、アキラではないにしろ誰かからの接触を待っていたのはわかったので、

アキラは盗聴の可能性を考え、必要最小限の情報を電話で森田に伝えた。

すると森田は交渉に応じてきたのだ。

その電話の際、先程の男達の素性も明らかとなった。

奴らは、指定暴力団「海江田組」の持つ情報機関だった。

ようはアキラの同業者なのだが、

アキラたちの情報機関とはほとんど接触したことが無かった。

「海江田組」は戦後、政治家との関係を強めていく中で巨大化していき、

現在関東から東北を勢力圏内にするまでになっていた。

政治家、とくに戦後から常に与党として政権を握ってきた民政党の議員と繋がりが深く、

民政党内の「若林派」と「春日派」の対立が高まりだした頃からは、

「若林派」は「海江田組」との関係を強めた。

「春日派」の議員で他殺されたり、自殺に追い込まれた者の影に、「海江田組」が見え隠れしていたことは、この業界の周知の事実だ。

「…俺はハメられたんだ。」

揺れ動く車内で、森田は語り出した。

「15年前、チンピラのような生活を送っていた俺達は、自然と「海江田組」と関わりを持つようになった。

最初は詐欺まがいの仕事の手伝いみたいなものだったが、しばらくすると、売春の斡旋を頼まれるようになった。

騙して連れ込んだり、女をさらって薬漬けにして引き渡したりもし

た。

そんな時に、あの監禁を頼まれたんだ。

彼女は俺達が幹旋した女だったが、
常連の上客とその女が揉め事を起こした。

それで女の監禁を指示され、
経過状況をその常連に報告し、女の写真を渡したりもしたんだ。」

そこで森田は一息ついて、自嘲気味に話しを続けた。

「結果はご覧の通りブタ箱行き。

サツと海江田組もズブズブの関係で、
たとえば俺が海江田組の事を話したところで、結果は変わらなかった
だろうがな。

俺がシャバに出た後も、

海江田組の連中が監視しているのはわかっていた。

昨年、俺を容疑者に仕立てたレイプ未遂の事件も俺への脅しだった。

……そんな時だった。

西村冴子が接触してきたのは……。」

「お母さんが……！」

必死に座席にしがみついていた香織が、
うめき声のように呟いた。

「西村冴子は、俺の身柄の安全を保証する代わりに、
俺の証言を取り引き材料に提示してきた。」

「証言？」

アキラは眉をひそめた。

「15年前のあの監禁で関係している、常連客の証言だ。」

その常連客は当時20代だったが、
父親が民政党の政治家で、「海江田組」とも繋がりがあったため、
売春組織と関係を持ったようだ。」

アキラの頭の中で、新たに加えられたパズルのピースがはめられていく。

「なるほどな。」

そして、

そいつは父親の地盤を引き継いで、民政党の議員となった。

しだいに権力を握っていく過程で、過去の目障りなものを消したくなった、

つてところかな？」

酷い揺れのなかで森田が笑う。

「その通りだ。」

車はまだ住宅街の路地を突っ切っている。

アキラはかなりの情報を入手したが、やはり謎なのが西村冴子だった。

「西村冴子は、何者なんだ？」

「詳しい事は俺もわからない。

…ただ、かつて在日CIA だったと語っていた。」

「……在日CIAだと？」

CIA、アメリカ中央情報局は大統領の直轄組織であり、米軍やその他米国政府内の情報機関からは独立した存在だ。

国務省や連邦政府がおおっぱらに關与する事の出来ない“裏稼業”を行なう事から、

「見えない政府」「もう一つのアメリカ政府」などと呼ばれることもある。

他国の政權中枢と反政府勢力の双方に接触して、政策決定をコントロールする分割統治方式を得意としている機関でもあった。

スパイを取り締まる法を持たない日本はスパイ天国であり、政財界やマスコミの中にも日本人のエージェントが多数潜伏していた。

C I A……

アキラの中に、

香織が「黒岩アキラ」と口にした時と同じような感覚が甦り、

いくつもの封印していたパズルのピースを浮かび上がらせ、

繋げていく……。

「まさか……！」
アキラが呟いた。

その時だった。

十字路を右折しようとした時、左折側からヘッドライトを点けないトラックがアキラ達の車に突っ込んできた。

「キャッ、！」

助手席でバウンドする形になった香織が叫ぶ。

森田は座席下に突っ込むように転がり落ちた。

トラックは車の左後部に激突したが、アキラはスピードを落とさず、ハンドル操作で体制を立て直そうとする。

トラックのヘッドライトが点き、
獲物を追う眼光よろしく、アキラ達の車を照らした。

車はタイヤを軋ませながらも、まるで氷の上でふらつくように、激しく左右にぶれている。

それを嘲笑うように、なおもトラックはぶつかってきた。

ハンドル、アクセル、ブレーキ、サイドブレーキ、……

両手両足をフルに使って、アキラは車を立て直そうとする。

相手は二人……！

その間も、アキラはバックミラーに映るトラックに目を走らせる。

その時、
トラックの助手席のサイドガラスの辺りから腕が伸びていて、銃口がこちらに向けられた。

マズイ……！

アキラがそれを確認すると同時に、

バンッ！！

というタイヤのバーストした音が響いた。

右のリアタイヤを失い、車の後部が左に持っていかれる。

「くっ……！！」

アキラは必死に車の後部を戻そうとするが、
コントロールを失った車は右の側壁に斜めに激突し、そのまま壁に引きずられるように進む。

「森田っ！！ドアを開ける！！」

言いながら、アキラは、
気を失っている香織にかぶさり、助手席のドアを開ける。

車は丁字路手前の電信柱に激突し、
アキラは香織を抱え込むようにして車外に放り出された。

森田がドアから飛び出すのと同時に、
トラックの二人が銃口を向けているのをアキラは確認した。

静寂の中に
銃声が鳴り響いた。

銃弾は森田の身体を貫き、森田は倒れ込んだ。

「森田っ!!」

香織に相手の照準が合わないようにながら、
アキラはグロック17を構えトリガーを引いた。

相手の銃声と重なる。

銃弾は運転席の男の腕に当たり、体を大きくのけ反らせたが、アキラも肩に銃弾を浴びていた。

痺れた痛みが肩に走り、アキラは追撃に遅れをとった。

助手席の男の銃口が、アキラの頭に照準を合わせる。

その時だった。

T字路から現れたワゴン車がアキラの目の前で急停車し、運転手がトラックの男を銃撃した。

相手はすかさず身を隠し、銃弾は外れた。

「早くしろ、弾切れしちまう！」

なおも銃弾を放ちながら、運転席の男が叫ぶ。

「あんたは……！」

アキラは驚きながらも、すぐに香織を担ぎ、開けられたドアから後部座席に滑り込んだ。

ワゴン車はすぐさま急発進し、加速を上げて住宅街を走り出した……。

■

COUNTER

アキラは座席を倒して、まだ気を失っている香織を寝かせた。

ワゴン車は県道に出ていて、
街灯やコンビニの明かりが闇を照らすようになっていた。

このまま進めば
先程と同じ国道に出るはずだった。

「危ないところだったな。」

運転席の男が、
くわえたタバコに火をつけた。

アキラにとってはいつも聞いている声だったが、

この時はいつもより覇気があり、静かな強さを秘めていた。

背筋を伸ばし、一本筋の通った姿は精悍でもあり、実年齢よりも若々しく見える。

アキラは男の肩越しに声を掛けた。

「こんなところでサボってて大丈夫なのか、

藤原さん？」

ビルの警備をしているはずの藤原が、アキラの問いに高らかに笑った。

「心配するな。

代わりの奴が詰めてるよ。」

「公安の同僚かい？」

再びアキラが問いかけると、藤原は更に大きな声で笑い出した。

「なんだ。

やっぱり知ってたのか。」

一ヶ月前、藤原がアキラのビルに配属が決まってから、アキラは藤原の身辺調査を行っていた。

身辺調査は藤原に限らず、アキラの周辺人物には必ず行っていることだった。

藤原が公安警察官だということは、

つい一週間前に届いた情報屋からの追加報告によってアキラは初めて知った。

当然、藤原という名前も偽名だ。

公安警察は、

警察庁警備局を筆頭とした、諜報活動を主な目的とする機関の総称であり、

政治的に動くため「政治警察」と呼ばれることがある。

公安警察官は、追尾や視察といった対象者を秘密裏に監視する手法の訓練を徹底的に受けていた。

公安警察官の対象者を監視する手法は、

世界的にみても非常に高度であると言われている。

また、公安警察官はたとえ他部門の警察官が同じ事案を扱っていたとしても、

情報交換をしないことでも有名だった。

アキラが藤原の素性を知るのに時間がかかったことから、

公安警察の優秀さは確かなものだった。

「あんたたち公安が、
なぜ俺をマークしているのかまではわからなかった。

まさか、この件で動いていたとはな…。」

公安は少なくとも、
藤原を派遣した一ヶ月前には既に、何かしらの情報を握っていたことになる。

藤原と会話をしながら、
アキラは肩に受けた銃弾の傷を消毒し、包帯で巻いた。

腕の痺れが少し残っているが、弾は貫通しているので、
化膿に注意さえすれば問題なさそうだった。

藤原が会話を続けた。

「俺達も確証があつて、
おまえをマークしてた訳じゃない。

最初は、要注意人物として森田をマークしてただけだ。

その後、森田と海江田組との接触は掴んだが、
その他に森田が誰と接触していたのかまではわからなかった。

そんな時だった。

俺達のもとに森田の情報に関するタレコミがあつたのは。」

藤原の話を聞きながら、

アキラはケータイで情報のやり取りを続けていた。

「誰なのかはわからなかったが、

その情報は西村冴子、そしておまえに関するものだった。

森田の情報を持っている西村冴子が、おまえと接触する、とな。」

「なるほどな。」

それで俺を追っていたのか。」

そこで藤原は苦笑いしながら

寝息をたてている香織に視線を送った。

「まあ、そのかわいいお嬢ちゃんが現れたときはさすがに驚いたがな。」

アキラも香織を見ながら、口元を緩めた。

無理もない。

公安にしてみれば、

西村冴子と接触すると思っ
ているところに、
香織が現れたのだ。

困惑したのはアキラも同じだった。

アキラは藤原の情報と、新たに情報屋から入手した情報をパズルに当てはめた。

西村冴子、

公安にタレコミをした人物、

そして見知らぬメールアドレスの主が誰なのか……。

アキラの頭の中では、

パズルはほぼ完成していて、

それが残酷な真実を示していることに、アキラはやりきれなさを感じて香織を見つめた。

「どうすんだ、これから？」

しばらくの静寂ののち、藤原がアキラに声をかけた。

やるべきことは決まっている、

そう決心したアキラが口を開いた。

「追いかけられるのはもう終わりだ。

今度はこっちが追う番だ。」

「何だと？」

藤原の眉間にシワが寄る。

「藤原さん、行ってほしい場所がある。」

■

STEP!

香織が車で目覚めた時、

アキラはガラス越しに夜空を見上げていた。

先程までの出来事が夢だったのではないかと思うほど、
アキラの顔は穏やかだった。

母親もよく空を見上げていたなと思い出して、
香織もガラス越しに見上げてみる。

街の明かりが夜空を照り返していて、
星の光を打ち消していたが、
いくつかの星は、その輝きが消えそうになりながらも瞬いていた。

「お嬢さん、起きたかい。」

藤原がバックミラー越しに声を掛けた。

「あ、はい……。えつと……。」

「職場の同僚の藤原さんだ。」

この人が俺たちを助けてくれたんだ。」

突然現れた見知らぬ顔に戸惑っている香織に、アキラが説明した。

「そうなんですか。」

ありがとうございます、藤原さん。」

香織がお辞儀をした。

「イヤイヤ、大したことはしてねえからよ。」

藤原が頭を掻きながら、照れ臭そうに笑った。

公安一筋でやってきた藤原にとって、アキラの監視・追尾も単なる任務でしかなかった。

しかし、この一ヶ月間アキラの情報を収集し、表面上にしろ直接アキラと会話を交わす中で、藤原の感情が少なからず揺れ動いていたのだろう。

でなければ、わざわざ危険を冒してまでアキラ達を助ける義理は無かった。

藤原の年齢を考えれば、

公安で部下を使う立場でもおかしくないが、

その辺の義理人情が出てしまふところが出世に響いているのかもしれない。

このあと、藤原には香織の保護も頼んでいたので、アキラは藤原に感謝してもしきれない思いでいた。

「香織。

俺は一人で行く所がある。

おまえはこの後、藤原さんについて行け。

……その前におまえに話しておくことがある。

おまえの母親のことだ。」

「……はい。」

香織は静かに頷いた。

「俺とおまえの母親、西村冴子は昔、同じ情報屋として働いていたんだ……。」

15年前、アキラが入れてもらった情報屋で既に働いていたのが、

真田真弓、

香織の母親の西村冴子だった。

アキラよりも半年早く働いていた真田真弓は、

その情報屋の中でかなりの成果を挙げていて、

情報屋としてはかけ出しだったアキラは真弓と組んで色々と教わる
ことが多かった。

馴染みの情報屋からの紹介で入ってきたという真弓は、
既に情報屋としての確かな技術を持っていた。

アキラは真弓に尊敬の念すら覚え、真弓から熱心に技術を学んでい
った。

真弓もアキラの熱心さに惜しみ無く自分の持つ技術を教えた。

そんな二人が付き合い始めるのに、
時間はかからなかった。

お互いの仕事柄、休み無しで働いているようなもので、一緒にいられることが唯一の利点であった。

月並みでもいい、

そんな幸せを真弓に与えることができるのだろうか？

不安に思ったアキラが真弓に尋ねたことがあった。

真弓は微笑みながらアキラを見つめて答えた。

「こんな幸せが、

一日でも長く続いてほしい。」と。

一年が経ち、アキラも情報屋としてやっていけるようになり、真弓とも幸せな時間を過ごしていた。

そんな時だった。

あることをきつかけに、

真弓は突然、アキラの元から姿を消したのだ。

その頃、アキラは真弓、

そして同僚の田崎陽平と共にある事案を扱っていた。

田崎陽平は同じ情報屋で5年以上働いていて、特に政治関係の情報に精通していた。

その事案の内偵を進めていた時、

アキラは、ある政治家に関する証人と接触することができたのだ。

その政治家とアメリカ外資系企業との癒着を証明することができる
大事な証人だったが、

真弓がアキラの前から姿を消したその日に、

その証人はビルから飛び降り自殺した。

証人がその政治家の関係者に殺されたことはすぐに掴めた。

アキラ達三人で内密に進めていた事案であつたため、

真弓が何かしら関係しているのは明らかだった。

依頼は取り消され、

アキラと田崎陽平は責任をとる形で証人を殺した相手を探し出して、
証人と同じようにビルから転落死させた。

アキラは真弓の行方を追ったが、足取りは掴めなかった。

その後、

真弓が在日CIAのエージェントで、
情報屋のスパイとして送り込まれたことがわかった。

「真弓が姿を消した日、

真弓は俺宛ての手紙を残していった…。

その手紙には
ひとこと

『ごめんなさい。』

と、書かれていたんだ…。」

香織は何も言えず、
ただ黙って聞くことしかできなかった。

それを見て、アキラは優しく微笑んだ。

「俺や藤原さんのように、
真弓は組織の一員として、命令された仕事をしたただけだ。

もちろん、

行動には責任を伴うが、

俺は彼女を恨んだりしてない。

アキラはそこで、

言葉を詰まらせながらも

話を続けた。

「ただ、その時、俺は…

真弓が突然いなくなったことが、

ただ……

ただ

悲しかったんだ……。」

うつむく香織に、

アキラは今度こそ笑顔を向けて言った。

「だから、

真弓が俺におまえのことを頼んだことがわかった時、

嬉しかったんだ。

俺になら任せられる、信じられると思って、

おまえの母さんは俺に

おまえを託したんだからな。」

「……………うん。」

香織は静かに頷いた。

夜空色の瞳が

涙で滲んでいた……。

それからしばらくは

車内に

エンジン音だけが

響
い
て
い
た。
■

ATTACK

「着いたぞ。ここでいいのか？」

国道沿いの路肩に車を止めた藤原が、アキラに尋ねた。

「ああ。助かったよ。」

目的地までは少し遠いが、
このまま車で接近するのは危険だったし、
藤原には一刻も早く香織を連れてこの場を離れてもらう必要があった。

藤原はアキラがどこへ行こうとしているのかを、
あえて聞こうとはしなかったが、
藤原のほうもだいたいは察知していて、

これ以上アキラに加担することになると、
公安全体の責任問題に発展しかねない事態になることは予想された。

「藤原さん。」

香織のことを頼みます。」

車から降りたアキラが、
藤原に一礼した。

「ああ、任せておけ。

おまえも無理するなよ。」

この後起きる事態を暗示するように藤原が声をかけた。

二人のやり取りから、

不安なものを感じ取った香織も心配そうにアキラを見つめている。

そんな香織に向き直り、アキラは力強く言った。

「必ず戻るから、心配するな。」

「はい。」

香織は精一杯の笑顔で答えた。

車は再び走り出し、

アキラはその後ろ姿を見送りながら、車に背を向けて歩き出した。

この先には私鉄の駅があり、
それを囲むように広がる繁華街、
その外れに目的地があつた。

■

S I L E N T

繁華街の外れにあるそのビルは、

見た目には四階建てのテナントビルのような佇まいをしていたが、

そのビルが「海江田組」の下部組織「風間組」の事務所であることは、

近隣住民なら誰でも知っていることだった。

一階は駐車場で、高級外車が並んでおり、

二階が神棚を奉った組の事務所、

三階が応接間兼、組員の詰め所となっていた。

その四階には調度品の並ぶ部屋があり、

趣味の悪い連中らしいと内心で呟きながら、

ケータイの画面に数字の羅列を打ち込んでいく。

「香織は無事ですか。」

情報は手に入りましたか。」

そのメールを送信しようとした時、
メールの着信音が鳴った。

アキラからのものだ。

………！

そのメールにはこう書かれていた。

「メールは必要ない。
直接話してやるよ。」

田崎さん。
「

その時、田崎の耳に銃声が響いてきた。

■

START

「風間組」の事務所は繁華街の外れということもあり、

周りに店はまばらで、

住宅街の中にあるような印象だった。

ここに来る間に拝借した自転車に乗って、

アキラは事務所へと近づいていく。

入り口前には、見張り番であろう二人の若い男が柄の悪い服装をして立っている。

駅の終電時間は過ぎていて、人通りは無かった。

二人の目には、

自転車に乗るアキラがそこら辺にいる一般市民に見えているようで、警戒心は強くない。

自転車に乗りながら、

先ほど打ち込んでおいたメールを送信し、ポケットにしまう。

すれ違いざま、アキラは腰の銃を抜いた。

続けざまに放たれた銃弾が、

二人の眉間に突き刺さり、折り重なるように倒れた。

アキラは容赦はしないと決めていた。

たとえヤクザであろうと犯罪者であろうと、命を簡単に奪っていい道理はない。

アキラにとっても「殺し」は仕事として割り切ってやっていたことであり、今は単なる私憤に駆られた行動と言われても反論することはできなかった。

海江田組や警察も徹底的にアキラを追ってくるだろう。

それでもアキラは、香織や真弓、そして自分のために動こうと覚悟していた。

自転車を放り出し、入口のドアノブに銃弾を撃ち込む。

ドアを蹴破ると、二階のドアから男がこちらに顔を覗かせた。

アキラが入り口から銃口を真っ直ぐこちらに向ける姿が、男の最期の記憶となった。

右目に銃弾を受けた男は、ドアに挟まるようにして前のめりに倒れていく。

と同時に、

既に階段を駆け上がったアキラは、開いたドアから銃口だけを覗かせて、二階事務所に向けて連射した。

素早く弾倉を装填し、事務所の中に飛び込む。

一人は胸板に二発が命中し、もう一人は喉元に空いた弾痕から奇妙な音をさせて倒れている。

事務機の死角から銃口が覗いているのを確認したが、アキラは机を踏み台にして飛び込んだ。

死角にいた男の姿が現れ、同時に銃弾がアキラの左腕に命中する。

激痛を無視して、アキラはその勢いのまま蹴りを繰り出す。

アキラのかかどが男の顔面を捕らえ、男は後ろの椅子に吹き飛んだ。

男に銃弾を浴びせ、

振り返ったアキラの目に、上階から降りてきた男が映る。

すぐさま横に倒れ込んだアキラの頭上を弾丸が通過するが、一発は腹部にめり込んだ。

倒れ込んだ机の死角から覗かせている男の足に射撃し、苦悶の表情で片膝をついた男との間合いを一気に詰める。

男の眼前に飛び込み、こちらに銃口を向けようとする男の顔面に拳をめり込ませた。

すぐさま階段を駆け上がり、三階の室内に滑り込む。

手前に応接間があり、その奥には中央の通路を挟むように詰め所がある。

詰め所の死角から放たれた銃弾を、アキラは壁際に飛び込んでやり過ごす。

三人……いや、四人いる。

ここで時間を潰すわけにはいかない。

シャツの腹部が徐々に赤く拡がっていた。

アキラはポケットから火薬やアルミの粉の詰まった紙袋を取り出し、

通路の中央へ放り投げた

そして、

その紙袋へ銃弾を撃ち込んだ。

■

REUNION

ビル全体に衝撃が走り、
轟音が鳴り響いた。

四階の床にも亀裂が入り、爆発の凄まじさを物語っていた。

田崎は、壁際に体を押し付けて、固く閉ざされたドアに銃口を向けている。

体の線が細く、官僚のように神経質なその顔は冷静さを保っていたが、足の震えを止めることができずにいた。

ドアの隙間や床下の亀裂から侵入する煙が鼻を突く。

轟音は収まり、室内は次第に静寂をとり戻しつつあったが、

田崎の不安は一層強くなり、鼓動が早まっていく。

その緊張に耐え切れなくなった田崎が、窓を開け防犯シャッターを押し上げた。

外の景色とともに、田崎の目に飛び込んできたのは、眼前に突き付けられた銃口だった。

声も出ずに後ずさりした田崎に、アキラは銃弾を放った。

肩を銃弾が貫き、田崎は傷口を押さえながら、仰向けに倒れた。

窓から侵入したアキラは、続けて田崎に発砲した。

両足の大腿部に埋め込まれた銃弾に、田崎は絶叫し、のたうち回る。

アキラは田崎の胸倉を掴み、皮張りのソファーに強引に座らせた。

「久しぶりだな、田崎さん。」

眼前にある銃口越しに、

アキラを睨みつける田崎に向かってアキラが冷徹な表情で見下ろした。

遠くで鳴るサイレンの音が耳に入ってきたが、まだ時間はかかるだ

ろっ。

「全とお見通し、というわけか…。」

無駄な反論はしないばかりに、田崎が呻くように口を開いた。

「ああ。

公安にタレコミをし、俺にメールを送ったのも、

そして、森田の件で真弓に協力し、その後真弓を裏切ったのも、
全てあんたがやったことだということは調べがついている。」

アキラは、そこで言葉を詰まらせながら、声を搾り出した。

「……………そして、

香織と真弓が…、

実の親子ではないということも……………」

■

BY GONE

もう少しで……

もう少しで、あの男を追い詰められる……。。

西村冴子は呪文のように繰り返した。

アキラのもとを去った後、真田真弓という名を捨てた西村冴子は、再び新しい名前を与えられてCIAの構成員としての活動を始めていた。

与えられた任務は全てこなし、組織からの信頼を得てきた。

全てはあの男を破滅させるために……

■

西村冴子は、
両親と姉のもとに生を受けた。

姉の美月は冴子より5才年上で、
才色兼備という言葉は美月のためにあるのだと冴子はずっと思っていた。

美月は小学生の頃から、成績は常に上位で体育も得意、
おまけにモデルのような容姿とくれば、
学校のマドンナになるのは必至だった。

一方、冴子というと、容姿は美月と何とか張り合えるが、
勉強と体育は「中の下」という感じで、

公務員出身の両親は、美月を神童のように扱い、
何かにつけて冴子と美月を比較した。

冴子は次第に居場所を失い、
中学生になった冴子は不良グループと付き合いようになっていた。

初めは、冴子を引き戻そうとしていた両親も、

冴子が高校生になっても付き合いを止めようとしないのであると、
いつしか冷え切った関係になっていった。

それでも、姉の美月は何かにつけて冴子とコミュニケーションをとろうと努力したが、

姉が名門国立大学で青春を謳歌していると思っっている冴子にとっては、

そんな姉の優しさもうざったいだけだった。

そんな冴子だったが、

姉の美月が突然、大学を中退しモデルを始めた時は、さすがに驚いた。

姉は両親と大ゲンカし、

そのまま家を飛び出していつてしまった。

姉と両親とは音信不通の状態になったが、

冴子は両親には内緒で時々美月と会っていた。

姉が突然、両親に反抗した原因の一端は自分にもあるのではないかと感じていた冴子だったが

美月と二人で食事をしていた時、

姉が冴子に話してくれたことがあった。

「わたしはいつでも優等生であることを求められ、
わたしも期待に応えようと努力してきた。

でも、ある時、

それが単に押し付けられたもので、

わたしが望んでしてきたことじゃないと思うようになったの…。

そう思った時、好きなことをやりたい、やりたいことをやるう、っ
て気持ちになったの。

そんなわたしには、少し歪んでいたかもしれないけど、冴子がいつ
も自分のやりたいようにやってる姿が眩しかった。

…だから冴子にも自分らしく、一生懸命生きてほしい……。」

姉には姉なりの苦悩や葛藤があるのだと、

そんな当たり前のことに気付こうともしなかった独りよがりな自分
を振り返り、

冴子は姉にすまない気持ちで一杯だった。

その後、冴子は不良グループとの関係を断ち、
猛勉強して大学へと進学した。

姉のほうは、
モデルの仕事は難しいようだが、
自分で決めた道だからと冴子に笑って話していた。

姉と両親の関係は相変わらずだったが、冴子と美月は頻繁に食事を
したりしていた。

冴子は大学でも上位の成績を修めていて、
そろそろ就職活動に目を向けようと周りが騒ぎ出した頃だった。

大学からのご指名で、ある企業が冴子に就職を持ちかけてきたのだ。
外資系のシンクタンクを名乗ったその担当者は、さつそく冴子にテ
ストを出した。

就職のしの字もわからない状態でテストをだされて困惑したが、
大学側からも丁寧に対応してくれと言われていたので、

冴子は仕方なく問題を解いていった。

テストとはいっても、

学校で習うような問題ではなく、IQテストや心理テストのような問題がほとんどだったが、問題数の多さにはさすがに閉口した。

解答を見た担当者は、大学側の人間を退室させ、そして冴子に言った。

「先ほどの対応、大変失礼しました。
一応、テストの一部だったものですから。

名称は伏せてもらいますが、わたしはある政府系情報機関の者です。
是非あなたに私たちの機関へ来てもらいたい。」

政府系………？
情報機関………？

あまりにも胡散臭い感じに、考えておきますと答えて、その場は終わったが、

その後も何度か担当者が現れ、希望職種も定まっていないう冴子は、その機関の幹部と会うことになった。

新聞で見かけたことのある顔が現れて、
熱心に勧められるうちに、冴子の就職は決まっていた。

就職後は、
周りには、もちろん就職先を正直に話すこともできず、
行動も制限されるため、家族や知人と接触する機会は激減していった。

そのような状況ではあったが、
冴子は働いているうちに、仕事の魅力に引き込まれ、やり甲斐を感じるようにになっていた。

簡単な情報収集から、次第に潜入の仕事がまわってくるようになり、
冴子も期待に応えようと努力した。

アキラが来ることになる情報屋への潜入が命令されたのは、そんな時だった。

アキラが来た頃には、

冴子はその情報屋の中でも重要な案件を任されるまでになっていて、情報屋としてはかけだしだったアキラの教育係という形で、一緒に行動することになった。

アキラは普通の人が見れば、どこにでもいる物静かな若者といった印象しか持てないだろうと思われた。

だが、冴子はアキラが年齢や性格からくるものとは違う、修羅場を経験しながらも、強い意思で様々な感情を封じ込めているような静けさを感じていた。

初めの頃は、アキラに対して恋愛感情は持っていなかった冴子だが、冴子の一目惚れで付き合い合っでは別れるという繰り返しに、男を見る目が無いと嘆いていた冴子が、アキラと付き合い合うことになるとは当人も思ってもいなかった。

アキラと一緒にいる時間が増え、

アキラの仕事に対する姿勢や、普段無感情を漂わせながら何気なく
見せる周りへの優しさから、

冴子は次第にアキラに引かれていった。

どちらから付き合おうと言ったわけでもなかったが、

仕事終わりに二人でラーメン屋に行った時に、
アキラが冴子に言った言葉を良く覚えている。

二人でラーメンを食べていたら、突然アキラが箸を止めて言った。

「こつこつって、デートと呼べるのか？」

冴子は噴き出しそうになりながら、

「そうじゃない？」

と、笑って答えた。

仕事柄、外で張り込みをする機会も多かったが、
そんな時、アキラは夜空をよく見上げていた。

空を眺めている時のアキラは、

冴子と接する時のような穏やかな表情をいつも浮かべていた。

普段はどちらかと言えば口下手なアキラだったが、
そんな時は熱心に冴子に話し掛けてきた。

「知ってるか？」

この夜空は、

今も少しずつ広がっているんだ。」

「一般相対性理論の応用ね。」

冴子が茶化すようにアキラに言った。

アキラは、仏頂面になって話しを続けた。

「そういう小難しいことは、どうでもいいんだよ。

とにかく、

今見ている星がずっと昔の輝きで、
もしかしたら今はもう星自体は無くなっているかもしれない。

その一方で、宇宙はそんなのは関係無しで風船のように膨らみ続けている。

そう考えると、

俺達の人生なんてほんの一瞬なんだなあって、つくづく思うんだ。

だからこそ、その一瞬を懸命に生きている人に共感して、自分も頑張ろうって思うんだろっな…。」

夜空を眺めるアキラを見て、冴子も再び夜空を見上げた……。

アキラといると、冴子自身驚くほど素直な自分が現れて、アキラに癒されていくのがわかった。

その一方で、

諜報員として偽りの自分でアキラに接していることに、例えばような無い罪悪感を冴子は感じていた。

そんな時、

姉の美月から冴子に会いたいと連絡が入った。

どうしても会いたいという美月に、

冴子は忙しい合間を縫って時間を作った。

久しぶりに会った美月は、少しやつれた印象だった。

「どうしたの、姉さん。」

「……………」。

美月は暫くの沈黙の後、冴子に話しはじめた。

「……………妊娠したの。」

「……………えっ？」

「わたし、妊娠したの。」

「この子はわたし一人で育てるから。」

最初、状況が整理できずに呆然とした冴子だったが、

我に帰り、

相手は誰なのか、どうして結婚しないのか美月を問い詰めたが、

美月は決して答えなかった。

それどころか美月は、

相手を探すようなことはせず、

両親にも言わないで欲しいと冴子に頼んできたのだ。

冴子は何とか説得しようと試みたが、

美月は引き下らず、冴子に応援してほしいと、涙を浮かべて頼まれたところで冴子も諦めた。

その後、美月は無事女の子を出産し、

「香織」と名前をつけた。

美月はモデルの仕事を辞めて、ホステスをしながら香織を育てていた。

冴子も時々美月と香織に会いに行ったが、美月は驚くほど元気だった。

香織からたくさん元気を貰っているからと、
穏やかに笑う美月が印象的だった。

その頃、CIAから冴子に指令が下りてきた。

それは、冴子が現在取り扱っているある政治家の案件に関するものだった。

冴子は、アキラと田崎と共にその政治家に関する内偵調査を進めていたのだが、

その政治家は民政党「若林派」に所属していて、
CIAとも繋がりのある人物だった。

その辺の関係は冴子も十分わかっていて、

その案件の担当になったことを上の幹部に伝えた時、
曖昧な状態で仕事を終わらせるように命令された。

冴子はあるべく重要な情報が上がらないようにしていたが、

アキラが決定的ともいえる証人を見つけ出したことで、状況は一変した。

CIAはその証人の殺害を決定し、冴子に身を隠すよう命令してきたのだ。

「残念だが、ここまでだ。お前は雲隠れしろ。」

そう言ってきたのは田崎陽平だった。

田崎は冴子がこの情報屋に入る前から、CIA諜報員として潜入していた。

こういったことが起きた場合の保険として、冴子が潜入していたということは冴子自身がよくわかっていた。

三人で内密に進めていた以上、誰が疑われるのかは明白だ。

……逃げるしかない。

そんなことは冴子もわかっていた。

……アキラ。

最後までアキラを裏切ることしかできなかった自分に、冴子は絶望するしかなかった。

冴子はアキラに手紙を残そうとしたが、アキラとの思い出ばかりが浮かび、涙が出るだけで言葉にすることはできなかった。

「ごめんなさい。」

その言葉だけを残して、冴子はアキラのもとを去った……。

CIAから提供された場所で、冴子はしばらくの間は身を隠していた。

外部との接触はほとんどできない状態で、

そんな冴子の頭に浮かぶのは、アキラの事ばかりだった。

その後、仕事にも復帰し
アキラとの思い出を振り切るように働いていた冴子のもとに知らせ
が届いた。

……… そんな馬鹿な。

それは、
姉の美月が殺害されたという知らせだった。

にわかには信じられない知らせに
冴子は頭が真っ白になっていた。

冴子が美月と再開したのは霊安室の中だった。

腹部に包丁で致命傷を受けたという話だったが、

顔には傷一つ無かった。

いつもの綺麗な美月の顔を見るうちに、

眠れる森の美女のように、
何かをきっかけにして美月が眠りから覚めるのではないかと冴子は
思っていた。

冴子は、自分の身体の時間の流れが狂ったような感覚になっていて、
気付いた時には、いつの間にか来ていた両親が、
美月の身体にすぎるように泣き崩れている姿が目に入った。

……香織。

思考を失っていた頭に、
香織の顔が浮かんできて、冴子はいつの間にか霊安室から走り出して
いた。

夜間保育園に預けられていた香織を冴子が抱き上げると、
香織は冴子に天使のような笑顔を投げかけた。

「姉さん……………」

冴子はそんな香織を抱き抱えながら、
人目もはばからずに泣き崩れた。

美月の告別式がしめやかに行われている時、
美月を殺害した犯人が逮捕されたことが冴子に伝えられた。

美月が殺された日、

美月は香織を預けた後、いつものようにスナックに出勤した。
殺害された時間、店には美月とオーナーのママ、そして常連客の年
配男性が一人いるだけだった。

容疑者の30代男性は、

刃渡り30センチの包丁を持ってスナックに押し入り、突然美月に切り掛かった。

美月の腹部を4回刺した後、男性客の胸部を刺し、逃げようとするママを背中から切り付けた。

その後、店のレジから現金を奪い逃走した。

美月と男性客は死亡したが、オーナーのママは一命を取り留め、彼女の証言から、仮出所中の容疑者が逮捕された。

冴子はまだ気持ちの整理もできていない状態だったが、これで事件の真相が明らかになると思っていた。

だが、そうはならなかった。

公判を控え、留置所で拘束されていた容疑者が、自らの衣服を使って首吊り自殺したのだ。

呆然とする冴子をよそに、被告人不在で裁判は消え去ってしまった。

……ありえない。

天文学的な確率で起こることが、自分の身に降りかかって、
冴子は冷静な思考で分析していた。

生前、美月が話していたことを冴子は思い出した。

わたしがもし死ぬようなことになっても、
両親には香織のことを秘密にしてほしいの……。

両親に迷惑をかけたくない……。

その時は、知り合いが働いている施設へ香織を預けてほしい……。

冴子がその話を聞いた時は、
まさかこんなことが起こると思っていなかったが、

今思えば、あの言葉は何かを暗示していたのではないだろうか？

美月はこうなることを予測して、
冴子に香織のことを頼んだのではないだろうか？

冴子は、知りえる情報網を使って容疑者に関する情報を収集し始めた。

仕事で時間が空けば、どんな些細な情報でも自ら足を運んで確認した。

その一方で、施設に預けた香織にも定期的に会いに行っていた。

せめて両親には、
香織の存在を知らせたほうが良いのではないかと思ったこともあったが、

美月と交わした約束だからと、
冴子は両親には知らせず、
自分が美月のためにも母親代わりになろうと決めていた。

そんな香織が、会ったたびに美月に似てくることが冴子はとても嬉しかった。

美月や容疑者に関する情報収集は、なかなかうまくは進んでいなかったが、

それでも冴子は我慢強く続けていた。

一つ一つの情報を精査し、取捨選択しながら、情報同士の繋がりを吟味していく。

蜘蛛の糸を手繰り寄せるような作業だったが、そこからある組織の名が浮かび上がってきた。

……海江田組？

冴子の所属するCIAと深い繋がりのある組織が関係している……。

まさかとは思ったが、更に調べていくと、次に浮上してきた名前に、冴子は言い知れぬ寒気を感じた。

民政党「若林派」……！

かつて冴子がアキラのもとを去った原因となった政治家も、
民政党・若林派だった。

姉の事件に政治家が絡んでいる、
しかも、

CIAと浅からぬ強い繋がりのある民政党・若林派が関係している。

背中から切りつけられたような感覚を冴子は感じていた。

地獄の釜のフタを開けてしまったような気がしたが、もう引き下がることはできなかった。

冴子は身内であるはずのCIAの目も気にしながら、作業を続けた。

そして、
時間はかかったが、冴子はある結論を導き出した。

その時から、

冴子は「復讐者」として生まれ変わり、動きだした……………。

■

もう少し……、

もう少しで、あの男を追いつめられる……。

冴子は自宅の窓際のソファで、呪文のようにつぶやいた。

そして、ふと窓際から夜空を見上げていた。

都心では珍しく、いつもより夜空の星が綺麗に煌めいていた。

自分でも不思議なほど、穏やかな気持ちになっていく。

その理由が、夜空の美しさだけではないことを冴子はよく知っていた。

さまざまな思い出が甦り、
アキラの姿が溢れてきた。

そして冴子は、いつだったか香織と旅行に行った時のことを思い出していた……。

香織がまだ小さい頃で、

冴子は仕事と美月の件での調査で疲れきっていたが、
時間を作って香織と二人で温泉地に出かけた。

「おかあさん、おそらが好きなの？」

湯上がりに、縁側から夜空を眺めていた冴子に、
香織が尋ねてきた。

冴子は笑いながら答えた。

「そうだよ。」

おかあさん、おそらを見るのが大好きなの。」

「ふうーん。」

「香織はおそら、嫌いなの？」

「うっん、かおりもおそろ好きだよ。」

そこで冴子の横に来た香織は、夜空を見上げて何かを探しはじめた。

「あっ、あれ、

おつきさん。」

「お月さん？」

「そう、おつきさん。」

あのね、いい子にしたら、おつきさんから、うさぎさんがあそびにきてくれるって、せんせいがいつてたの。」

先生も上手いことをいうもんだと、冴子が感心していると、

「ねえ、おかあさん。」

「ん？何？」

「かおり、いい子にしたら、おとうさんもあいにきてくれるかな？」

「お父さん」という響きに、冴子は一瞬鳥肌が立つのを感じたが、少し考えてから答えた。

「きつと、会いに来てくれるよ。」

「ほんと？」

「ほんとうだよ。」

お父さんはお仕事忙しいから来れないけど、

お父さんは、お母さんみたいにいつもお空を見て、

香織に会いたいってお願いしてるんだよ。」

「へえ、そうなんだ。」

香織は目を見開いて、嬉しそうに笑った。

変な嘘をついたかな、と冴子は香織に悪い気がしたが、

本当に叶ってほしいと、

冴子はアキラの顔を思い浮かべながら、夜空の月を眺めていた……。

■

BATON

「…………おまえが、
真弓を…、西村冴子を殺したこともわかっている。」

アキラは田崎の額に銃口を突きつけ、
呻くように声を出した。

「若林派」の政治家と美月の繋がりを突き止めた冴子は、
CIAの仕事をする一方、
その政治家の不正に関する情報の収集を地道に続けていた。

身内のCIAと繋がりのある情報屋とは接触することができなかつたため、

おのずと利用できる情報機関は限られていた。

その頃、「殺し屋」として再出発していたアキラは、その業界で頭角を現し始めていたようだ。

もちろん、元「情報屋」で、

しかも冴子自身が直接手ほどきをして教育したアキラが、

自分の関与がわかるような仕事をするはずも無い。

冴子のもとに、直接アキラの名前が浮上することは無かったが、

それでも冴子は行政機関とアキラの間接的な繋がりから、アキラが関係していたと思われる事案は何となくわかった。

冴子は、アキラと繋がりがありそうな情報屋との接触も避けるようにしていた。

アキラが冴子の存在を知って追いかけてくるかもしれない。

アキラは恨んでいるかもしれないと思いながらも、

昔のような関係に戻りたいと願っている独りよがりな自分を、冴子は消し去りたかった。

長い年月をかけながら、

困難をきわめた情報収集を続ける一方で、

あの男が政治家として、権力の階段を着実に上っていく姿を見ながら、

高みに登れば登るほど、転がり落ちた時の傷は深く、

より強い絶望を与えることができると、

冴子は復讐者としての顔で、
その男を眺めていた。

そんな荒れた心を癒してくれたのは香織だった。

香織との手紙でのやり取りは頻繁にしていたが、

組織の目を盗んで施設に行けたのは月に一、二度だった。

小さい頃は冴子に甘えてばかりだった香織は、
自分より小さい子供達の面倒を見るようになっていた。

次第に香織が「お姉さん」になっていく姿に、
冴子は自分と美月を重ね合わせ、懐かしい気持ちになった。

そんな時、田崎が美月の件で冴子に接触してきた。

冴子が内密に進めていたことを掴んだ田崎は、

CIAには知らせず、美月に協力すると申し出てきた。

田崎が冴子の持つ情報を悪用しようとしていることは、冴子もわかっていた。

だが、ここでCIAに知られるわけにはいかない。

冴子は苦渋の決断をして、田崎と共に動くことにした。

一方、CIAから怪しまれないようにし、信頼を得るためにもCIAの仕事も精力的に冴子はこなしていた。

冴子が「若林派」と対立する「春日派」の代議士の私設秘書として潜入していた時、

冴子は当時、仮出所中であつた森田雅明の情報を掴んだ。

冴子は、海江田組から監視されている森田に対して、身の安全と逃亡の手助けをする代わりに、証人になることを持ちかけ、森田も承諾した。

ところが、その情報がCIAに知られてしまったのだ。

CIAから追われる身となった冴子が頼れる人間は限られてしまった。

冴子は田崎の助けを借りて、活動を続けた。

■

「……だが一ヶ月前、

冴子はお前が美月の殺害に関与していたことを知ってしまったんだ。

」

部屋には徐々に煙が立ち込め始めていて、火の手がすぐそこまで迫ってきていた。

サイレンの音も次第に大きくなっていて、終わりが近づいていることを物語っている。

「当時、お前は美月が冴子の姉であることを知りながら、仮出所中の男を海江田組を使って脅し、美月の殺害の手引きをした。

その後、お前らの息のかかった警察幹部を利用して、容疑者を自殺に見せかけて殺害したんだ。

冴子にそのことを知られてしまったお前は、海江田組を使って冴子を拉致したんだ。」

そこでアキラは、苦悶の表情になった。

ヤクザに引き渡された女が、どういう末路をたどるか、

この業界で長く働いているアキラは、痛いほどそのことを知っていた。

「香織への手紙を見つけたお前は、
冴子の持つ情報を手に入れるために、
情報屋を通じて俺のメールアドレスと暗号を高値で入手した。

俺の関わっている情報屋は、
行政機関、とりわけ公安のような組織と繋がりが強い。
どちらかといえば、身内に近い関係だ。

お前は公安にタレコミして、いざという時の俺のボディガード代わりに公安をつけた。

そして香織へ手紙を送って、
俺と香織を引き合わせ、俺が冴子の情報を手に入れるのを狙っていたんだ。」

銃口を突きつけられている田崎が、
歪んだ笑みをうかべた。

「……お前に追い詰められるのは、
これで二回目だな……。」

冴子がアキラのもとを去ってから、
アキラは田崎を極秘に調査し、CIA構成員であることを突き止め、
追い詰められた田崎は何とか命を拾うことができた。

「ああ。二回で終わりだ。」

アキラはあくまで冷徹な表情で田崎を見ていた。

そこで田崎は突然、額を床にこすりつけて土下座した。

「頼む、もうお前達には関わらないし、
この世界からも足をあらう。」

だから、命だけは！

命だけは助けてくれ！」

「……真弓は命乞いをしたのか？」

アキラの言葉に、田崎はハツとなり、
呆然とした顔をアキラに向けた。

アキラはその顔に、
銃弾を一発打ち込んだ。

■

日常から非日常へ

洗い物をすませて、時計を見ると、すでに深夜の3時半を回っていた。

鷹橋智子は、

カーペットに大の字になって寝ている達也を見て、そっとブランケットをかけ直した。

午前1時過ぎに帰った達也に晩酌代わりのおかずを出すと、

テレビで「ダイ・ハード」がやっていた。

懐かしいと思いながら、

達也につられて見ていたら、こんな時間になってしまっていた。

映画の中盤で、すでにイビキをかき始めていた達也は、すっかり寝入ってしまったようで、

起こすのも悪いと思った智子は、そのまま達也を寝かせていた。

スポーツ雑誌のライターをやっている達也は、
最近は毎日のように深夜に帰宅していた。

智子は少々無理をしている達也の体が心配ではあったが、
目を輝かせて仕事をしている達也を思い浮かべて、
気持ち良さそうに寝ている達也を見ながら微笑んだ。

今はほとんど専業主婦のような生活だが、
鷹橋智子もかつては政治部の新聞記者として、
忙しい毎日を送っていた。

■

大学卒業後、大手新聞社に就職した智子は、
警察担当のサツ回りをしばらくした後、

民政党「春日派」の代議士・高杉一郎の番記者となった。

入社当時はジャーナリスト精神に溢れ、情熱を燃やしていた智子だったが、

そこで目の当たりにしたのは、マスメディアと警察、政財界との馴れ合いの関係だった。

終身雇用を前提として報道機関に採用された新卒者は、次第に特権意識を持ったまま成長し、単なる報道機関の「会社員」となっていく。

そこには一般企業と変わらない「業績至上主義」や「出世争い」といった現象が起きて、

記者たちは報道の本来の目的・使命を忘れ、個人と企業の業績向上だけを目的として行動するようになっていくのだ。

一部の大学卒業者が大半を占める政治部の記者は、特に特権意識が強く、

また、番記者は取材対象者と距離が近くなるため、癒着が生まれることもある。

金銭の授受や工作、果ては事件のもみ消しに加担する等の行為が過去に行われたこともあった。

智子が担当になった高杉は当時、
与党・民政党の政調会長をやっていたが、

「若林派」が実権を握る民政党において、

高杉の所属する「春日派」は単なるお飾りであると、
マスコミの間では囁かれていた。

ほとんど左遷されたような気持ちでいた智子だったが

高杉の番記者をつとめるうちに、
次第に高杉の魅力に引き込まれていくようになっていった。

女好きと評判だった高杉を、
最初の頃は警戒していた智子だったが、

高杉は智子たち番記者を平気で自宅に上がらせて取材を行っていた。
そのうち高杉の奥さんや娘さんとも親しくなり、

智子は高杉と家族ぐるみで付き合つようになっていった。

智子は番記者として、対象者の政治家に近づきすぎるのは危険だと感じていたが、

そんな智子に、

「お前に新聞の一面を飾って貰って、
刑務所送りにされるのなら本望だ。」

と、高杉は高らかに笑いながら話した。

政治家、特に政権の中枢にいる者は、それなりの悪事を行っている
場合が多いが、

高杉はクリーンだとは言わないまでも、
そういった政治家と比べれば、

高杉のやっている事は、子供のようにかわいいものだった。

高杉がいつだったか智子に言った言葉を思い出した。

「俺の一番の弱点は、女好きなところだが、

それだつてちゃんと一線はわきまえるようにしているからな。」

娘のように可愛がつてもらっていた智子は、「亭主関白」を装いながら、実は「かかあ天下」である高杉の奥さんを思い浮かべて、思わず笑ってしまった。

そんな時、智子はある筋から「若林派」の代議士に関する不正受諾の情報を手に入れた。

ぜひ記事にしたいと上司に頼んだが、

「若林派」と智子の新聞社の関係から記事にすることは許されず、

智子は高杉の担当を外されることになった。

ちょうどその頃、大学時代から付き合っていた達也からプロポーズをされていた智子は、

仕事への執着もまだあったが、新聞社を退職し達也と結婚することに決めたのだ。

結婚してからの智子は、スポーツ記者としてはまだ半人前だった達也の取材の手助けをするようになった。

忙しい日々の中、
家族ぐるみで付き合っていた高杉と会う機会も無くなっていき、

智子は次第に政治の世界から遠ざかっていった。

■

「さて、寝るかな。」

智子は達也を寝室で寝かせようと、達也の肩を揺すろうとした。

「――――」

と、その時、

智子のケータイの着信音になった。

心当たりのない電話番号が画面に表示され、

知り合いにしても、こんな深夜に非常識だと、智子は電話を取らず

にいたのだが、

さすがに4回間を置かずに電話がかかってきたところで、
智子是不審な顔で電話に出た。

「もしもし。」

智子是不機嫌さを隠そうともせずに話しかけた。

『……………』

「えっ？クロイワアキラ？」

どこかで聞いたような、と智子は記憶をたどっていく。

『……………』

「ああっ！アキラ!？」

急に記憶の引き出しが開かれて、智子は思わず大きな声をあげてしまった。

智子が新聞屋に入社した頃、
情報を提供してもらっていた情報屋にいたのがアキラだった。

当時、智子はサツ回りをしていたのだが、
肝心な情報を上げない警察相手に、智子はアキラから重要な情報を
いくつももらっていたのだ。

「久しぶりじゃない。」

先ほどのまでの不機嫌さや、
自分のケータイ番号を何故アキラが知っているのかという疑問は吹
き飛び、

智子はかつて記者として駆け回っていた自分を思い出していた。

『……………』

「えっ、村田弓子？
もちろん知ってるわよ。」

高杉さんのところにいた時、
わたしと弓ちゃんと高杉さんで出かけたこともあったから。」

次々と懐かしい名前が聞こえてきて、
智子の記憶の引き出しがどんどん開け放たれていった。

だが、それからアキラが話し始めた事を聞くうちに、
智子の表情は次第に険しくなっていた。

『……………！』

「……………それ、本当なの？」

そこで智子はテレビの画面を見た。

テレビではニュースがやっていた。

それは日付が変わる前に起こった、
神奈川県でのガス爆発事故を伝えるものだった。

ニュースで伝えている事が、
突然身近で起きたような出来事になって、

智子は不思議な感覚に襲われた。

アキラは話を続けた。

「……………」

「……………わたしに頼みたい事？」

深刻な話をしている智子をよそに、

鷹橋達也はイビキをかいて気持ち良そうに眠っていた……。

■

P R E P A R A T I O N

「いやー、素晴らしい講演でしたよ。」

後援会長が三沢に駆け寄ってきて、満面の笑みで声をかけてきた。

「そうですか、ありがとうございます。」

日頃、後援会長の愚痴ばかり言っている三沢も、本人の前ではつとめて笑顔で対応していた。

二人が話している間も、

武藤は常に周りの状況に気を配って三沢の前を歩いていた。

三沢の後ろには鴨居が警護し、

さらに後ろに少し離れて陣内がついて来ていた。

三沢は現在、民政党の幹事長を務めていて、

この日は地元の市民ホールで開かれた講演会に参加し、

『郵政事業新改革法案』成立の断固阻止について熱弁していた。

今は講演も終わり、

この後、三沢は後援会の集まりに参加することになっていた。

「まったく、ゆつくりトイレにも行けやしない。」

また後で、と後援会長と別れた後、

三沢はさっそく愚痴を言いながら、客員用のトイレへ向かった。

「鴨居、中で警護しろ。」

武藤は、三沢がトイレに入る前に鴨居にトイレ内をチェックさせ、自身はトイレ前の警護、陣内は通路出入口を固めていた。

トイレ内をチェックした鴨居からOKが出て、

今にもズボンのチャックを下げそうな勢いで、三沢はトイレに入っていた。

すると通路出入口に、

背広姿に黒ぶち眼鏡をかけたサラリーマン風の男が現れた。

ビジネスバッグを両手で持ちながら、辺りをキョロキョロと見回している。

顔は脂汗をかいていて、苦しそうな表情だ。

と、こちらのトイレの表示を見た男が小走りにこちらに近づいてきた。

……あれ？通路を固めていた陣内の姿が見えない。

武藤がそう思った時には、男は武藤の目の前まで来ていた。

武藤が男を遮って、声をかけた。

「すみません。

こちらのトイレは客員用……………」

言い終わらないうちに、

男の手から放られたビジネスバッグで武藤の視界が覆われた。

やられた、と思い、武藤がバックを跳ね退けると、視界に男の姿は

ない。

すかさず視線を下に向けると、

武藤の足元で屈んでいた男がすでに伸び上がってきていた。

男の右拳が武藤のあごを貫き、

武藤はそのまま仰向けに倒れていった。

男がすぐさまトイレに侵入する。

鴨居は外の異変に気付き、

銃を抜き、トイレに侵入してきた男に照準を合わそうとする。

がしかし、

すでに鴨居の眼前まできた男は銃を持つ腕を払いのけ、

鴨居の懷に飛び込んで、みぞおちにヒジの一撃を打ち込んだ。

視界がぼやけ、膝をついた鴨居は前のめりに倒れた。

「だっ、誰か……！」

叫ぼつとする三沢の口を塞ぎ、男は鴨居から奪った銃を突き付けた。

「静かにしていれば、危害は加えません。
三沢先生に届け物を渡しに来ただけですから。」

そう言うと、

男は三沢の内ポケットにSDカードを差し入れた。

「よく考えておいて下さい。
死ぬよりはマシだと思いますから……………」。

その言葉を聞き終わらないうちに、
三沢は急激な眠気に襲われた……………。

■

JUMP!

「ただいま。」

「お帰りなさい。」

一週間ぶりにアキラの顔を見た香織は、
笑顔でアキラを出迎えた。

アキラが風間組の事務所を襲撃してから一週間が過ぎていた。

香織はアキラと別れた後、
藤原たち公安が用意してくれたマンションの一室に案内された。

この一週間は、その場所で女性の公安警察官の保護・監視の下、香織は生活していた。

公安の方へは、藤原が上手く話してくれていたようで、
公安はとりあえずはアキラの側について様子を見ることに決定した
ようだ。

香織と生活することになった女性は、
保護・監視とはいいいながらも、事件に関することを香織にほとんど
聞いてこなかった。

「藤原さんから、普通に二人で生活してればいいからって言われて
るから。」

「楽なものでしょ？」

と、その女性は香織に笑いながら話した。

その女性も、

今日はアキラが来ることを知らされて外に出ていたので、

今は香織とアキラの二人だけだった。

「今日はわたしがご馳走しますね。」

そう言うと、香織は台所で何やら作りはじめた。

「何作ってた？」

興味にかられてアキラが覗きこんだ。

「オムライスです。
お母さんに教えてもらったんです。」

「…………お母さんが。」

アキラの記憶の中では、
冴子はあまり料理が得意なほうではなく、
アキラは我慢して口に運んだことが何度もあった。

常に隙を見せない冴子に対して、
一つくらい欠点があったほうが可愛らしいと、
アキラはそう思って、その頃は済ましていた。

「お母さんのオムライス、すごく美味しくて、
教えてもらってからわたしが施設で作ったら、
みんなも美味しいって評判が良かったの。」

あと美香さんも、

あつ、美香さんって今お世話になってる警官の人なんだけど、
美香さんも美味しいねって。」

香織は冴子を自慢するように、
嬉しそうに話しながらオムライスを作り、テーブルに並べた。

「さあ、食べましょう！
いただきます。」

「……………いただきます。」

そう言うと、アキラは恐る恐る口に運んだ。

「どうですか？」

「……………美味しい。美味しいよ！」

アキラは本当に驚いた顔で香織に答えた。

「良かった！」

香織はお母さんが褒められたように喜んだ。

それから、

昔の冴子を知りたいとしつこく聞いてくる香織に負けて、

アキラが昔話を喋ってあげて、香織も笑いながら聞いていたのだが、しばらくすると、香織が真剣な顔で話を切り出してきた。

「……ねえ、アキラさん。」

お母さんが今どうしているか、もし知っているなら教えて欲しい……。」

…それはアキラも考えていたことだった。

香織に本当の事を言うべきかどうか、アキラはここに来てからもまだ結論が出ないでいたのだ。

だが今の香織は、何かを覚悟しているような顔でアキラを真っすぐ見ていた。

その顔を見て、アキラは正直に話すことに決めた。

冴子がこの事件に巻き込まれて殺されたこと、

そして冴子が実の母親ではなく、本当の母親である美月ももうこの世にはいないことをアキラは香織

に伝えた。

香織は必死に涙をこらえながらアキラの話を聞いていたが、

次第に嗚咽を漏らしはじめ、

話し終わってからしばらくは、うつむいたまま涙を流し続けていた。

そんな香織の姿を、アキラはただ見守ることしかできなかった……。

■

「ほら、月が綺麗に見える。」

今日は満月だったんだね。」

夜空を指差しながら香織が言った。

しばらくしてから、

アキラと香織は窓際に座って夜空を眺めていた。

「お母さんも夜空を見るのが好きで、
そんな時は、お母さんもすごく穏やかな顔をしてたなあ……。」

アキラの穏やかな顔を見た香織が言った。

アキラが笑って答えた。

「よくお前の母さんと一緒にこうやって夜空を眺めたな……。」

すると、香織は真剣な顔で話しはじめた。

「……わたし、時々お母さんに抱かれてる夢を見るの。」

だけど、それが何故かお母さんじゃない別の人に抱かれてる感じで、
顔もお母さんのような、似ている人のような、不思議な感じで、

……そんな気持ちで目が覚めるの。」

アキラはじつと香織の話聞いていた。

「……あれは本当のお母さんに抱かれていた頃の記憶なのかなって。」

さっき、そう思ったの。」

「……香織。」

そこで冴子の顔がよぎったアキラは、何かを言わなければと思ったが、香織は笑いながらアキラに言った

「ううん、違うの。」

わたしは幸せ者だなんて、そう思ったの。

だって素敵な二人のお母さんの記憶がある人なんて、そんなにいいでしょ？

……だからすごく嬉しいの。」

そう言って微笑んでいる香織を見て、アキラが言った。

「俺はお前に感謝してるよ。」

「えっ、わたしに？」

香織はアキラに感謝しっぱなしだったので、驚いてしまった。

「俺の中の冴子は、突然いなくなったあの日で止まってしまった。

なぜ、どうして、……。

夜空を見て冴子のことを思い出すたびに、
穏やかな自分が冴子に語りかけていたんだ…。

その一方で、冴子が本当に俺のことを愛してくれていたのか、真実
と向き合いたくない自分がいた。」

そこでアキラは夜空を見て、冴子にも話しかけるように言った。

「お前と、お前の母さんのおかげでわかったんだ。

過去で止まっていたのは冴子じゃない、俺自身だったんだと。

そつやって、背中を押して一歩進ませてくれたことに感謝してるんだ。」

再び香織の瞳が涙で濡れたが、

その顔は微笑みで溢れていた。

「……………お母さんはアキラさんに感謝してるよ、
きつと…………。」

満月の明かりが、
やさしく二人を照らしていた…………。

■

MEMORY (1)

「お久しぶり、智ちゃん！
さあ、入って入って。」

事務所の玄関先で出迎えた年配女性の笑顔を見て、
鷹橋智子も笑顔で返事をした。

「お久しぶりです、永瀬さん。
お忙しいのにすいません。」

笑顔のままの永瀬に促されて、智子は事務所に入ってしまった。

智子がアキラからの電話を受けてから一週間が過ぎていた。

久しぶりに訪れた高杉の事務所だったが、
今の智子に懐かしさを感じている余裕はほとんど無かった。

「高杉さん、智ちゃんがいらつしやいましたよ。」

ドアの前まで来た永瀬が高杉に声をかけた。

智子は、永瀬の「高杉さん」という言葉を聞いて、
変わらないなあという気持ちになって、少し落ち着きを取り戻した。

「入ってもらいなさい。」

高杉のドスの利いた声が、部屋から聞こえてきた。

「失礼します。」

智子はドアを開けた。

「久しぶりだな、智ちゃん。
よく来てくれた。」

高杉はそう言うと、豪快に笑った。

「高杉先生、ご無沙汰しています。」

智子は深々と頭を下げた。

そこで高杉は、さらに大きな声で笑いながら言った。

「俺の『先生』嫌いを忘れたわけじゃあるまい。」

イヤミのつもりか？」

「もちろん、イヤミですよ、高杉さん。」

智子も笑って答えた。

高杉は自分が「先生」と呼ばれることを異常なほど嫌がっていた。

支援者から「先生」と呼ばれるのは何とか我慢できるのだが、

身近な人間や、官僚などから「先生」と呼ばれると、

高杉の顔は途端に不機嫌になり、

「俺はお前の先生じゃねえ！」と、怒鳴り始めるのだ。

高杉いわく、

「先生っていうのは、子供に道徳を説くことができる人間だけに使えばいいんだよ。」

俺達みたいなヤクザ者に使うから、

アホみたいな政治家や弁護士ができまうんだよ。」

とのことらしい。

一時は、「先生」と呼べる職業を法制化しようと、高杉は大まじめに言って、周りが呆れるほどだった。

「連れがいるんだろ？」

入ってもらいなさい。」

そこで高杉に促されて、

智子は声をかけて、中に入ってもらった。

そこに現れたのは香織で、続いて入ってきたのは初老の男性だった。

白髪混じりの髪とヒゲをたくわえ、

少し猫背な姿勢で、目は薄いサングラスの奥にあるため、よく見えなかった。

「事務所の中なら、問題あるまい？」

初老の男性に、そう声をかけたのは高杉だった。

「そうですね。」

男性はそう言うと、カツラを取って付けヒゲを剥がした。

「ずいぶん念入りだな。」

高杉の言葉に、メガネを外しながらアキラは答えた。

「一応、追われる身なので。」

俺と接触したことで、高杉さんに迷惑をかけられませんから。」

「そうか。」

ところで、挨拶は『はじめまして』でいいのかな?」

高杉はそこで意地の悪そうな顔をした。

それを聞いたアキラは、

苦笑いしながら高杉に言った。

「そうですね。」

お互い、ちゃんと目を見て話すのは初めてなので。

はじめまして、高杉さん。」

そこでまたしても、高杉の豪快な笑いが部屋に響いた。

「それもそうだな。

はじめまして、だな。」

実際には、

アキラが高杉と会話を交わすのは、これが二度目だった。

一度目は大阪のホテルでベッド越しに、

しかもアキラが高杉に銃口を突きつける形での対面だった。

一週間前、風間組を襲撃した後、

アキラは智子に、高杉の事務所内に自分を入れてもらえるようにお願いしていた。

智子と高杉が以前、家族ぐるみで付き合っていたことを知り、昔の恩を返してもらうつもりでは無かったが、

アキラは、高杉の信頼の厚い智子に何とか働きかけてほしいと、するがる思いで頼んだ。

ただいくら智子の頼みとはいえ、

大阪の件もあつたばかりの高杉が、
不特定な人物を簡単に自室に招き入れるとは思えなかった。

そこで、アキラは智子に高杉への伝言を頼んだのだ。

「以前、大阪のホテルでおこなつた非礼を謝りたいと思つております。

つきましては、一週間の間にお詫びの品を届けますので、
ご考慮のほど宜しくお願いします。」

智子はメモを見ながら、アキラが言ったことをそのまま高杉に伝えた。

何のことだか、智子にはさっぱりわからなかったが、
それを聞いた高杉は、大声で笑いながら、

「よし、わかつた！
必ず連れて来いよ。」

と、嬉しそうに智子に言ったのだ。

高杉の性格はアキラもだいたい掴んでいたもので、この伝言を聞けば必ず高杉は乗ってくる。

そういう確信がアキラにはあったのだが、

自分から提案したこととはいえ、実際に自分が銃口を突きつけた相手と面と向かって話すことに、

さすがのアキラも、ばつの悪さを感じていた。

「約束の品はしっかり受け取った。
君に会えて嬉しいよ。」

そんなのはお構い無しだという態度で、高杉はアキラに言い、

そして高杉は、香織の前にきた。

「はじめまして、高杉さん。」

香織が高杉に一礼した。

「……そうか、君が香織さんか。」

よく来てくれたね。

君のお母さんには、わたしも随分世話になったんだ。

君がここへ来た時は宜しく頼むと、君のお母さんからお願いされていたんだ。

やっと約束を果たすことができて嬉しいよ。」

智子から大体の事情は聞いていた高杉は、

その際、

私設秘書として自分のところで働いていた冴子の死についても知らされていた。

香織を見る高杉の目は、

若干涙で滲んでいるようにも見える。

「そうなんですか、お母さんが……。」

わたしも高杉さんに会えて嬉しいです。」

香織は笑顔で答えた。

その顔を見た高杉が言った、

「こんな美人の娘さんがいるとはな。

確かにお母さんにそっくりだが、お母さんよりも美人じゃないのか？」

さっそく女好きの虫が騒いだのか、

女性の目利きは確かな高杉が妙に鋭いことを言った。

それを聞いたアキラは、

天国にいる冴子と美月がどんな顔をしているだろうかと思って、笑ってしまった。

「香織。

俺達は高杉さんと話があるから、しばらく席を外してもらえるか？」

アキラの問いに香織が「うん、わかった。」と答えると、

後ろに控えていた永瀬が香織に近寄って声をかけた。

「私もお母さんとは仲良くさせてもらっていたの。
向こうでお母さんの話、聞かせてくれる？」

永瀬の問いかけに頷いた香織は、永瀬に連れられて部屋をあとにした。

■

MEMORY (2)

部屋に残ったアキラと智子は、高杉に促されてソファに座った。

「……それにしても、

お前からの贈り物だが、大阪の件を差し引いても釣りが出過ぎるぞ。

」

高杉は困惑した顔をアキラに向けてきた。

「そうですか？」

「金融・郵革大臣の香山、

財務大臣の岸部、

国対委員長の杉内、

そして幹事長の三沢。

こいつらは全員、

俺の作った『郵革新法案』に反対してた連中だが、

この一週間で、

揃いも揃って突然賛成にまわると言ってきた。きやがった。

……お前の仕業だろ？」

高杉の問いただすような視線に、アキラは笑って答えた。

「時間が無かったので、少々無理はしましたが、
うまくいったようですね。」

この一週間、アキラは高杉に会うための裏工作をしていた。

アキラは、
高杉が成立を目指している『郵革新法案』の障害になっている人物
をピックアップし、

情報屋から彼等を脅せるだけの情報をかき集めた。

そして、その情報を彼等に直接手渡したのだ。

「一応、すでに俺の手元に情報がある人物が、情報を集めやすい人
物に絞りました。」

そうでなかったら、さすがに一週間では無理だったので。」

「なるほどな。」

そこでアキラは苦笑いした。

「あなたと違って、うしろめたい過去を持つ政治家は多いですからね。」

アキラの言葉は、逆に言えば、

高杉を脅せるだけの決定的、かつ致命的な情報を手に入れることは、アキラや他の情報機関でも難しいということでもある。

アキラは大阪で高杉を銃で脅したが、

実際、その時のアキラは、

次の一手になるような高杉の情報を掴むことはできていなかったのだ。

「俺が秘書をやっていた時の親分も、同じように情報で脅されたことがあってな。」

俺も代議士になってからは、
その辺は気をつけるようにはしてたんだが……。

今思えば、俺は運が良かっただけなのかもな。

親分はいろんなもんを背負わされてたからな……。」「

政治家でなかったら、

きっと何処かのヤクザの親分になっていたであろう高杉が、

政治に対して、これだけ清潔に真っ正面から向き合っているという
事実、アキラも正直驚いていた。

「あなたのところに潜入した西村冴子も、大した情報をCIAに上
げてはいなかったんでしょう。」

その言葉を聞いた高杉が、苦悶の表情になりながら話しはじめた。

「弓ちゃ……冴子くんは大変な事態になっていたんだな……。」

「いつもと同じ様に呼んであげて下さい。」

高杉が、冴子の名前を言うことで記憶を引き出そうとしているのを見
て、

アキラはまるでここに冴子がいるように高杉に言った。

「……………そうだな。」

…俺が弓ちゃんと初めて会ったのは、5年くらい前だったかな。

当時、私設秘書を探してた俺は、同じ派閥の仲間から弓ちゃんを紹介されたんだ。

履歴書なんて見ずに、俺が面接したんだが、

一目見て、思わず『採用だ』って言っちゃまって、

その日のうちから働いてもらったんだ。

まあ、他の秘書はびっくりしてたがな。」

それはそうだろう、とアキラは思った。

普通は身辺調査をやって、

その上で問題が無ければ採用するというのが常識の世界で、

面接した日に働き始められたとなつては、
秘書が慌てふためく姿は容易に想像できる。

もちろん、CIAから送り込まれた冴子が、身元がわかるようなヘマをするはずはなく、身辺調査は問題無しだったのだろう。

「俺の独断で採用したようなものだったが、

それが正しかったということは、事務所の人間みんなが知ってるよ。

俺が進めていた法案なんかも、弓ちゃんのお陰で成立したのが沢山あったからな。

美人で頭が切れて、

その上、社交術にも長けていたから、

政財界のパーティーがあると、決まって弓ちゃんに同伴してもらったもんだよ。

パーティー会場でも、弓ちゃんは際立って華があったが、

そんな時でも、

隙を見せず男を寄せつけないオーラみたいなのが弓ちゃんには漂っていたよ。」

そこで智子が口をはさんだ。

「私も何回か高杉さんに同伴させられたことがあったけど、

弓ちゃんがきてからはパツタリ無くなったものね。」

高杉が笑いながら話を続けた。

「智ちゃん、それは言いつこ無しだ。

まあ、そんな弓ちゃんだったが、それでもアタックする男は沢山いたよ。

だが、政財界の有名人やその御子息にも、弓ちゃんはなびかなかった。

俺の顔をたてるつもりで、何度かデートに行ったこともあったが、みんな撃沈して帰ったそうだよ。」

そこで、高杉の新たな記憶の引き出しが開かれたのか、高杉は突然大笑いしながら言った。

「そういうパーティーの時は、弓ちゃんはあるより食事をとらないんだけどな、

帰りの車の中で、弓ちゃんは決まって『ラーメン食べましょう、高杉さん!』って言うんだよ。

そんなもって、
小汚いラーメン屋にドレス姿とタキシード姿が並んでラーメン食べるからよ、

その違和感たるや凄いもんがあつたよ。」

アイツらしい、とアキラも思わず噴き出してしまった。

「ほんとに面白い女だったからな、

だから尚更、いい男を見つけて幸せになって欲しいと思ったよ。」

高杉のその言葉に、智子がすかさず茶々をいれる。

「どうせ弓ちゃんが男を連れてきても、みっちり身辺調査をやるんでしょ？」

そこで少しムスツとした高杉が言った。

「そんなのは当たり前だろ！
大事な娘のためなんだから。」

すかさず智子が切り込んだ。

「わたしが達也にプロポーズされたことを、ポロツと喋った時なんか、

突然、怒りだして、

『俺に挨拶なしとはどういうことだ!』

って言って、

それで、私の両親に会いに行く前に二人で高杉さんのところに行っただけだね。

ガチガチの達也が土下座して、

『僕に娘さんをください。』って言ったら、

高杉さんたら、

『お前に娘はやらん、帰れ!』

なんて言うのよ。

わたし、昔のテレビドラマを見ている感じがしちゃって恥ずかしくて、恥ずかしくて。

そこで、高杉はばつの悪そうな顔になった。

「いやー、あれは俺も悪かったと思ってるよ。」

それもひとえに、大事な娘同然のお前や弓ちゃんに幸せになって欲しいと思っていたからだろうが。」

そんな高杉だが、
まさか大事な娘の元彼氏に銃口を突きつけられるとは思わなかっただろう。

昔話に夢中になっていたが、
高杉の顔は次第に苦しそうな表情になっていった。

「……そんな弓ちゃんが、……まさかな。」

そこで一息ついた高杉が再び話しはじめた。

■

MEMORY (3)

「……三ヶ月前、弓ちゃんが突然、秘書を辞めたいと俺に言ってきたんだ。」

結婚でもするのかと俺は思っただけど…。

しばらく黙っていた弓ちゃんが話しはじめたんだ……。」

「……わたし、高杉さんに謝らなければならないことがあるの。」

冴子は重い口を開いた。

冴子の尋常ではない様子に、

高杉はできる限りの笑顔を作って言っただ。

「おう、どうせ大したことじゃねえんだから、全部吐き出しちまえよ。」

そんな高杉の優しさを感じながら、冴子は話し始めた。

「……わたしは、CIAの諜報員で、スパイとして高杉さんの事務所に潜入したの。」

高杉さんに関する情報は、定期的に上層部に上げる。そんな活動をずっと続けていたの。」

C I A ……？

スパイ ……？

高杉は、にわかには信じられない話に、半信半疑で黙って聞いていた。

「名前はもちろん、戸籍も潜入するために用意されたものなの……。」

わたしの本当の名前は西村冴子。

…… 4年以上もお世話になりながら、

わたしは高杉さんや事務所のみんなをずっと騙し続けていたの。

……… 本当にすいませんでした、高杉さん。」

冴子は涙を流しながら、高杉に謝りつづけていた。

初めて見る冴子の涙に、

現実なのか……、と高杉は夢から覚めたような気持ちでいた。

高杉も政界に飛び込んで随分経つので、
そういったスパイ絡みの話を沢山聞いてきた。

現実が存在する以上、高杉や事務所の職員も十分気をつけてきたつもりだった。

なるほど、見事なものだな……。

そう感心している自分に、高杉は不思議な気持ちがあった。

冴子を前にして、

怒りや憎しみといった感情は高杉の中に芽生えてはこなかった。

まだ泣いている冴子に、高杉は語りかけた。

「…………お前も苦しんでいたんだな。」

偽りの自分で俺たちに接することに、
ずっと罪悪感を持ち続けていたんだな…………。」

冴子はうつむいたままだったが、
そんな冴子に高杉は微笑みながら言った。

「たとえ名前や戸籍が偽りだったとしても、
お前の全てが偽りだったわけじゃねえだろ。」

お前の笑顔…………、
お前の怒った顔…………、

そして、
今流している涙も…………。

俺達はみーんな知ってるんだぜ…………。

お前がいい女だってことを……。」

「……………はい。」

冴子は泣きながら、まっすぐ高杉を見つめてうなずいた。

■

アキラは一言も喋らずに高杉の話を聞き、
智子は声を押し殺しながら泣いていた。

「……………俺にスパイであることを明かしたということは、
CIAと何かしらトラブルがあったんだと思い、

手助けできることは何でもすると弓ちゃんに言ったんだ……………」

そこで高杉は、

ドアの向こうにいる香織を思い浮かべた。

「俺が何度そう言っても、アイツはずっと断り続けていたんだが…」

……ひとつだけ俺にお願いしたいと。

娘が何か問題を抱えてきた時は、力になってあげて下さいと、

……その言葉を残して、弓ちゃんは事務所を去っていったんだ。」

涙を必死に拭いながら話していた高杉は、
嗚咽を漏らしながら自嘲気味に言った。

「あの時、無理にでも手助けしていれば……」。

……後悔先に立たずとは、よくいったもんだぜ。」

「……冴子の方はまだ生きています、高杉さん。」

アキラは自らを鼓舞するように高杉に言った。

「まだ、終わってはいない。」

ここで幕引きになることの方が、冴子にとっては死ぬよりつらいでしょう。

俺は、冴子の意思を全うしてやりたい。」

「……そうだな。」

高杉は強くうなずいた。

「高杉さん、あれを見せてほしい。」

アキラはそう言いながら、部屋の隅にある簡易机を指差した。

その机の上には、
櫃でできた碁盤^{かや}が置かれていた。

困碁の腕前はプロ級という高杉は、
時々プロをこの自室に招いて碁を打っていた。

「……………碁盤？」

高杉がいぶかしげな顔をした。

「いえ、その下の物です。」

アキラの言葉につながされて、高杉が碁盤の下を見た。

そこには、

鍋敷きのような扱いで碁盤を乗せられているノートパソコンがあった。

■

ALBUM

「本当にこの中にあるのか？」

パソコンを起動させて、何やら調べはじめたアキラに向かって高杉が言った。

「可能性は一番高いと思います。」

画面に次々に映る情報に目を走らせながら、アキラは答えた。

高杉がこのパソコンを貰ったのは一年ほど前だった。

知人の政治家が、今時パソコンを使えないと時代の流れに取り残されるぞと、

事務所に直接送ってきたのだ。

正直なところ、

高杉も周りの人間もあまり乗り気ではなかったのだが、

せっかく貰ったんだからやってみましょう、と言っ秘書たちの言葉に、

高杉は渋々うなずいた。

高杉は秘書に教わりながらパソコンと格闘したが、

「文字が小さい！」

「目がチカチカする！」

などと、散々文句を言い、結局、三日坊主で終わってしまった。

その後は、

飾りにもならないと高杉に邪魔者扱いにされて、碁盤の鍋敷きに様変わりしていた。

アキラは画面を見たまま、傍らに立つ高杉に言った。

「あなたが一年前にノートパソコンを貰っていたと知り、俺はそこに可能性を感じました。」

このパソコンが放置されていたことは、

三ヶ月前までこの事務所にいた冴子もちろん知っていた。

政治家から高杉へ贈られたものである以上、

譲り受けるのは、周りの人間でも気が引けるだろう。

あるいは、高杉の気が変わって、

また使われるかもしれないと思われていたかもしれない。

結局、パソコンは放置されたままになった。

冴子は万が一に備えて、最も安全な場所に情報を保管しておきたいと考えるはずだ。

外部からの情報へのアクセスが難しく、しかも保管場所の発見が困難であるという条件を満たす場所。

そして、もし自分が死亡した場合に、情報を託すことができる人物に近い場所。

自分が冴子の立場なら、そう考えて場所を探すだろう。

アキラが話を続けた。

「ここに来て、ネットに繋がっていないことを知り、可能性は上がりました。

奴らにとってハッキングはお手の物ですからね。

……あとは、あの扱いを見て確信しましたが。」

重い碁盤の下敷きのまま眠らされるとは、一年前の最新型であったこのパソコンも考えもしなかっただろう。

そして、このパソコンも「白」、つまり高杉へ贈る過程で情報機関が介入した形跡もなかった。

「これをいい機会にしてまた始めたら？」
智子がいたずらっぽく高杉に言った。

高杉は惘然とした顔をした。

その時、

アキラは、画面を見ながら忙しく動かしていた手を止めた。

「…………『album』。」

そう呟くと、アキラはファイルを開いた。

すると画面に、整然と並べられた写真が映し出された。

そこには高杉や冴子、そして事務所の人間が写っていた。

皆で旅行に行った時のものや、

高杉の選挙戦中に撮ったもの、

そして何気ない事務所での日常を撮ったものなどが、

ページをクリックするたびに次々と現れた。

「へえー、このパソコンにこんな写真を保存してたのか。」

高杉も知らなかったようで驚いている。

「あつ、わたしと弓ちゃんの写真もある！」

智子が嬉しそうに笑った。

写真の中で、生き生きとしている冴子を見ているうちに、

調べている途中だということも忘れて、アキラもしばらくは写真に見入っていた。

14年という歳月は、人を変えるには十分な時間であり、それは外見だけをとらえれば尚更である。

しかし、

昔から、可愛らしさと美しさを兼ね備えていた冴子は、

その14年という時間の中で可愛らしさと美しさに磨きをかけ、さらに母親の強さも身につけたようだ。

写真の中にいる冴子を見て、アキラはそう感じていた。

外見は若いと言われるアキラだが、

自分自身が精神的に成長しているのかは、正直アキラにはわからなかった。

カメラに向かって笑っている冴子の顔を見て、

変わらないね、と冴子に言われているような気がして、アキラは苦笑いしながらページをめくった

「こうやって写真を見るのも悪くないな。」

三日坊主で自分が放置したパソコンを褒めるように高杉が言った。

と、アキラの手が止まり、一枚の写真にくぎ付けになった。

どこかのアパートの前で撮ったと思われる写真なのだが、

その写真は女性の全身が入るように少し離れた場所から撮られていた。

そしてその女性は嬉しそうに笑いながら、

大事そうに赤ん坊を抱きかかえていた。

少し遠めから撮られているせいか、
アキラは写真を見た時、冴子かと思ったのだが違った。

……美月か。

まだ赤ん坊だった香織を大事そうに抱きかかえて、
おそらくカメラを持つ冴子に向かって、優しく微笑んでいる美月が
そこにいた。

……これか。

アキラが写真をクリックすると、写真に関する情報が表示された。

簡単な日記形式で書けるようになっていたのだが、日付や名称欄も
空欄になっていた。

アキラは香織から預かっていた壱万円札をとりだした。

そして、そのスカシに書かれた文字を名称欄に打ち込んでいった。

.....
お
守
り。



TRUTH

「よし、侵入したぞ。」

名称欄に打ち込んだ途端、画面は真っ黒になり、中央にパスワード入力という文字が現れた。

アキラは壹万円札の識別番号と同じ文字を打ち込んだ。

Enterキーを押した途端、再び画面は明るくなり、今度は整然と並んだファイルがびっしりと現れた。

「一体何が入ってやがんだ……？」

さすがの高杉も、好奇心よりも不安のほうが大きいらしい。

ファイル名は無記名になっていたのも、

アキラはとりあえず一番左上のファイルを開けてみた。

だが、アキラはその内容を見て、「とりあえず」などという中身で

はなく、
いきなり本丸にのり込んでしまった気がした。

高杉も食い入るように画面を見ている。

「……こりゃ、

とんでもねえ爆弾を置いてったな、
弓ちゃん……。」

それは、民政党「若林派」の大物代議士に関する不正行為を、
詳細に調査した情報だった。

財界との贈収賄はもちろん、
新興宗教団体や「海江田組」の関係団体、そして警察やマスコミと
の癒着、

果てはアメリカ共和党の指示による日本の政策誘導への加担、など
など。

しかも、

それらに関係する人物同士の繋がりが、

それを証明してくれる証人と、その証人を脅すための情報、

さらには、
証人が既に死亡している場合には、
殺害に関与した組織と人物の情報まで書き込まれていた。

そしていずれの情報にも、
それらを証明するための写真や映像が添付ファイルとして保存されていたのだ。

アキラと高杉は、その情報量と正確な分析に、鳥肌が立つ思いでいた。

「アキラ、こっちのパソコンも繋がったわよ。」

高杉の机に座っていた智子がアキラを呼んだ。

アキラは秘書が使うノートパソコンの一台をこちらに移動し、智子に先ほどと同じように操作して貰っていた。

アキラの予想通り、高杉のパソコンと同じように、秘書のパソコンもファイルの並ぶ画面に辿り着いた。

アキラは高杉のパソコンと秘書のパソコンの情報を比較した。

「やっぱりな。」

秘書のほうはダミーだ。」

「ダミー？」

智子と高杉が口を揃えて言った。

「ダミーとはいっても、その情報は真実だし、脅しの材料としては十分だ。」

だが、高杉さんのパソコンの情報と比べると、重要度が低い情報ばかりだ。

ハッキングされた場合に、

高杉さんのパソコンの情報の“影武者”として、

冴子が忍ばせておいたんだろう。」

「……………それにしても、

これをそのまま出したら、大変なことになるぞ……………！」

高杉の顔は、完全に血の気が失せている。

「……………羽柴大二郎と、

……………羽柴和彦。

現役の『総理大臣』と、
女房役の『官房長官』、

その親子を、世界のさらし者にしろというのか……！」

高杉の気持ちは、アキラにも痛いほどわかった。

当時、世界でも類を見ない、
国政のナンバー1とナンバー2を親子で務めるというニュースは、
またたく間に世界中をかけ巡った。

そんな親子をマスコミも囃し立て、
ワイドショーは、連日二人の動向を追っていた。

最近では、
そんな馬鹿騒ぎも鎮静化し、
父親の羽柴大二郎首相の人気にも陰りが見えてきたが、
息子の羽柴和彦の人気は健在で、
次期『総理大臣』の有力株とされている。

高杉は呻くように言った。

「……羽柴親子だけじゃない。」

ここに名前の上がつている政財界やアメリカの重鎮たちも追及されるだろう。

……日本とアメリカの国内は大混乱だぞ。」

アキラは高杉の話を聞きながら、

冴子が羽柴親子を追っていた理由を探していた。

そして、それを示すファイルにたどり着いた。

……やっぱり、そうなのか。

「……何だ、これは？」

アキラの傍らに立つ高杉が、不審な目を画面に向けた。

その画面には20人を越す女性の名前がリスト化されて並んでいた。

「……『羽柴和彦が売春組織を介して関係を持った女性』……？」

……ほとんど死亡か行方不明じゃねえか。」

そのリストの中には、森田雅明が監禁・殺害した女子高生の名前も含まれていた。

女性の名前は、関係を持ったとされる西暦順に並んでいる。

と、その時、

画面の名前を追っていた高杉の目が、

ある女性の名前で止まった。

「……16年前……西村美月。」

高杉はそう呟き、呆然となった。

■

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1206q/>

ステップ

2011年3月2日00時30分発行